

350
224

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



350-224

巖谷小波編

校訂
少年日露戰史

東京 博文館藏版

大正
3. 2. 18



皇天治明

陸 海 の 諸 親 王

伏見宮殿下

久邇宮殿下

有栖川宮殿下



閑院宮殿下

東伏見宮殿下

梨本宮殿下

山階宮殿下

伏見若宮殿下

陸海の諸將軍

(一)
大山巖



東郷平八郎
上村彦之丞

乃木希典
黒木爲禎

軍將諸の海陸

(二)

郎七岡片

貫道津野



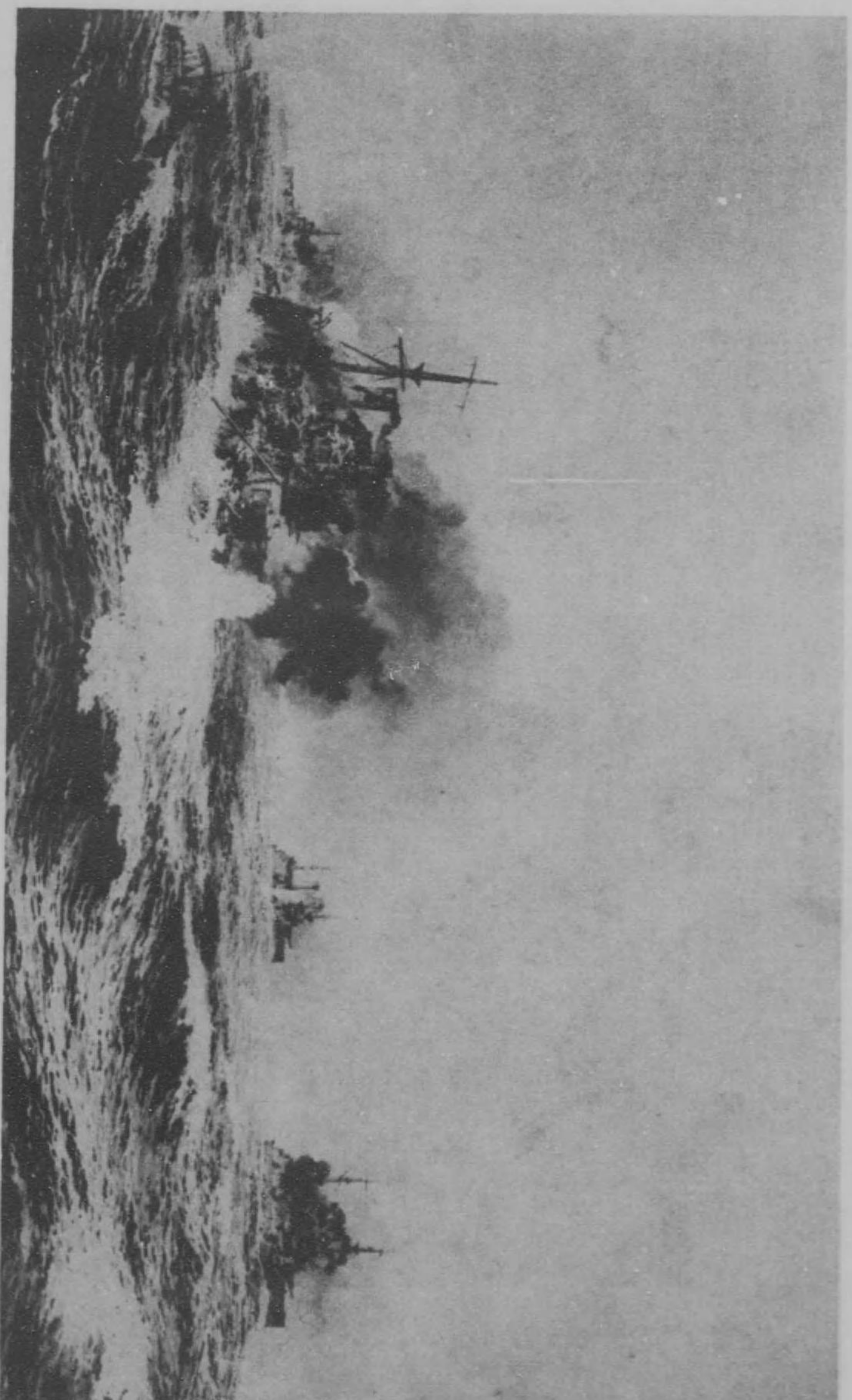
鞏保奧
文尙見立

遠重羽出

吉外生瓜
明景村川

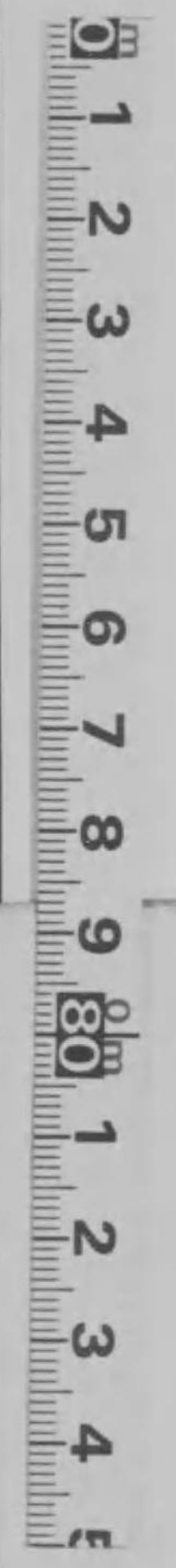
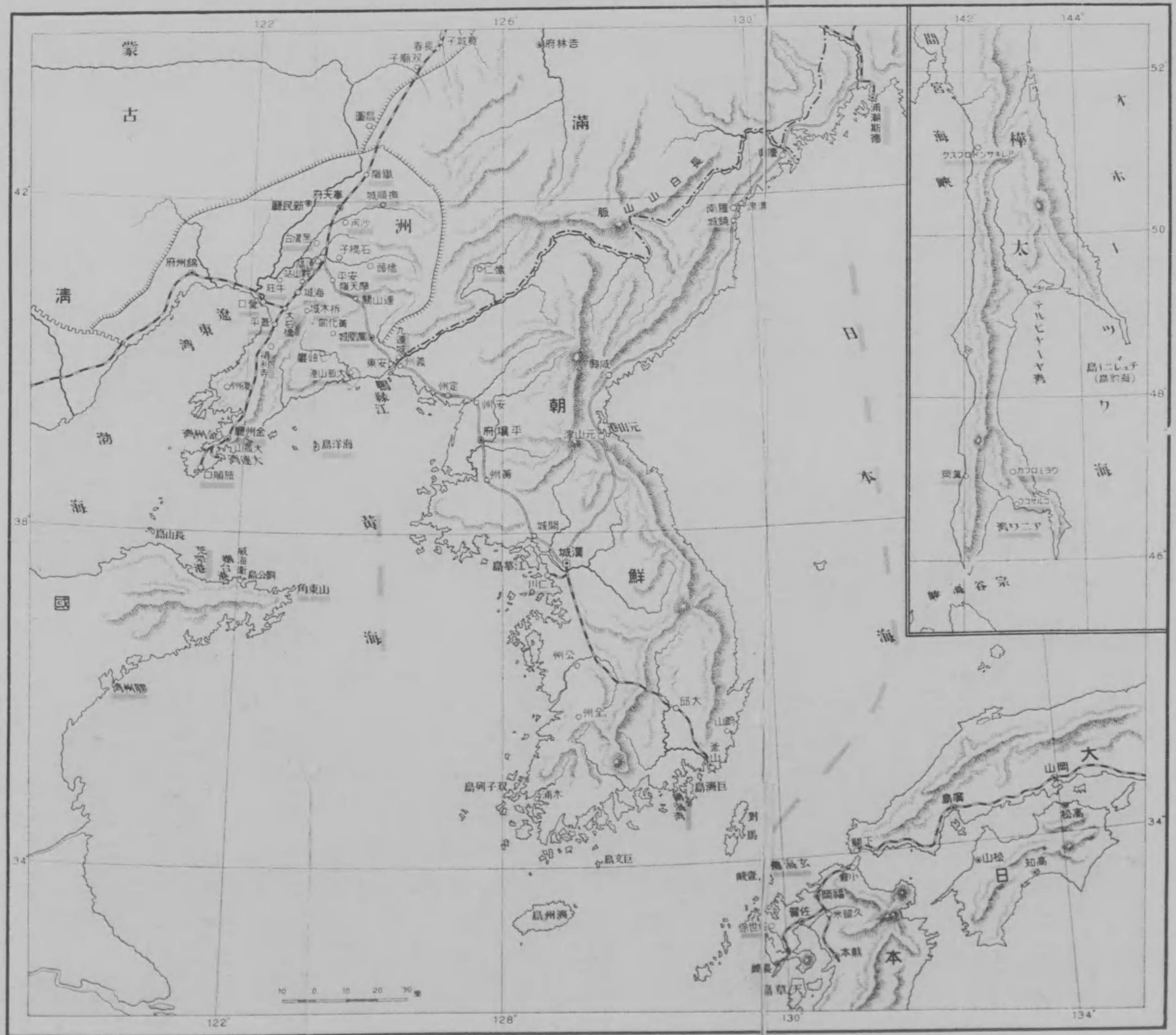


旗 順 の 占 領
(波部審也畫)



戰 劇 の 海 本 四
(畫 郎 太 鉦 城 東)





序言

明治三十七七八年戦役は、畏くも我が明治
天皇の御偉業中、最も偉大なるものであつ
た。苟も我が帝國の民たるもの、之を忘れ
て済むであらうか。

去る程に、今は大正の三年である。而し
て此紀元節は、當時初めて宣戦の大詔を拜
誦してから、將に十年目になるのである。

思へば當年母の膝にあつて、戦捷を報ず
る號外の鈴の音に、無心の眠を破られた者
も、今は國民教育を受けて、已に相應の讀
書力を得る事になつた。されば斯云ふ可憐
の人達に、當時の鈴の音の由來を説くのも
決して無用の事ではあるまい。否、當時已
に事を解し得た、我々先進者なる者の、將
に義務たるを信ずるのである。

蓋し著者は、當時已に感ずる所あつて、
此書を公にしたのである。其後去年の秋に
成つて、初めて滿鮮の地を巡遊し、親しく
各所の戦蹟を弔ふに當つて、更に鑑る所あ
り、茲に校訂改版を施して、現代の少年諸
子の爲めに、之を提供するのである。

惟ふに當時の愛讀諸子の爲めには、今や
他の良書によつて、更に事蹟を詳にするの

便があらう。然し之に代る、今の少年諸子の爲めには、尙此程度の讀物の、或は恰好ではあるまいか。

大正三年二月

巖谷小波

凡例

凡

例

一 此書は明治三十七八年戦役當時、其都度の戦報に基づいて、順次編纂し來つたものを、今度更に校訂し、改版し、そして合本したものである。

一 嚴密なる校訂を施せば、本書に誌す所も、更に大の添刪を要するであらう。然し讀者を少年とするが爲めに、専ら簡易と興味とを主として、わざと深く穿鑿しなかつた所もある。

一 要するに此書は、彼の空前の大偉業に際して、大元帥陛下は申し上げるまでもなく、上は司令官よ

例
 凡
 一 此書を改訂するに付いては、去年の滿洲旅行が、
 大いに有益であつたのを喜ぶ。其旅行に便宜を與
 へられた、南滿洲鐵道會社、朝鮮總督府鐵道局、
 京城日報、朝鮮新聞等の好意を、此に記して謝意
 を表す。

編者

目次

第一編 開戦の卷

第一章の戦争の原因	一	第二章 三國の干渉	四
第三章 露西亞の無法	七	第四章 露西亞は何んな國か	一五
第五章 文明と野蠻の戦	一六	第六章 艦隊の出發	三
第七章 仁川の海戦	一五	第八章 旅順の攻撃	一五
第九章 宣戦の詔勅	三	第十章 國民皆兵	一六
第十一章 舉國一致	一四	第十二章 春日日進の到着	一四

第二編 決死隊の卷

第一章 日韓の條約	一七	第二章 閉塞の計畫	一五
-----------	----	-----------	----

目

二

第三章 決死隊の出發……………五

第四章 決死隊の行動……………六

第五章 驅逐艦の激戦……………三

第六章 間接射撃……………六

第七章 第二回の閉塞……………七

第八章 閉塞の成功……………五

第九章 マカロフの戦死……………六

第十章 行軍の困難……………六

第十一章 騎兵の奮戦……………八

第十二章 露艦の亂暴……………六

第三編 九連城の卷……………九五

目

第一章 鴨綠江の地理……………五

第二章 海軍の應援……………六

第三章 架橋の掩護……………九

第四章 江上の大砲戦……………一〇

第五章 九連城の總攻撃……………一六

第六章 九連城の陥落……………二二

第七章 蛤蟆塘の激戦……………二三

第八章 敵軍の同志討……………二六

第九章 諸兵の苦心……………二八

第十章 金州丸の事……………三三

第十一章 捕虜の厚遇……………三七

第十二章 鳳凰城の占領……………三〇

第四編 南山の卷……………一三四

目

第一章 第三回の閉塞……………一三

第二章 閉塞の成功……………一七

第三章 上陸の困難……………二二

第四章 普蘭店の鐵道破壊……………二四

第五章 大戰前の小衝突……………二八

第六章 金州の占領……………三五

第七章 南山の大激戦……………三五

第八章 南山の占領……………三五

第九章 第二軍の名將……………三三

第十章 青泥窪占領の奇功……………三六

第十二章 大連灣の掃海……………三九

第十二章 嗚呼吉野初瀬……………三九

第五編 得利寺の卷……………一七七

目

第一章 恨は深き玄海洋……………一七

第二章 常陸丸と佐渡丸……………一七

第三章 和泉丸と羽後丸……………一八

第四章 上村艦隊の苦心……………一八

第五章 第二軍の新行動……………二五

第六章 得利寺とは何所か……………二七

第七章 龍王廟の騎兵戦……………一九	第八章 得利寺の激戦……………三三
第九章 中央隊の戦況……………三六	第十章 左翼隊の戦況……………三八
第十一章 右翼隊の戦況……………三九	第十二章 戦争の結果……………三七

目 第六編 摩天嶺の巻……………二二一

第一章 大孤山上陸軍……………三三	第二章 岫巖の占領……………三四
第三章 賽馬集の掃清……………三七	第四章 張家石の激戦……………三〇
第五章 炎天の行軍……………三六	第六章 分水嶺の戦闘……………三七
第七章 摩天嶺の逆襲……………三九	第八章 二度目の逆襲……………四五
第九章 武運強き馬場大佐……………四二	第十章 橋頭の大戦……………四五
第十一章 滿洲軍總司令官……………四五	第十二章 天の時と人の和……………六一

第七編 大石橋の巻……………二六四

第一章 熊岳城の逆襲……………二六	第二章 蓋平の占領……………二六
第三章 大石橋の敵……………二九	第四章 砲兵の苦戦……………三三
第五章 右翼隊の大夜襲……………三五	第六章 月下の血戦……………三七
第七章 彼我の損害……………三九	第八章 營口の占領……………四〇
第九章 橋木城と海城……………四二	第十章 榆樹林子と様子嶺……………四三
第十一章 ケルレル將軍の戦死……………四五	第十二章 伊豆沖の敵艦……………四八

第八編 黄海の巻……………三〇三

第一章 珍らしや敵艦の出港……………三三	第二章 水雷艇隊の夜襲……………三七
第三章 哨艦の攻撃……………三九	第四章 龍王塘と鮮生角……………三三
第五章 三驅逐艦の勇戦……………三五	第六章 待ちに待った敵艦隊……………三八
第七章 三笠の勇戦……………三三	第八章 敵艦隊の敗走……………三七
第九章 逃走の敵艦……………三〇	第十章 ノーキックの最期……………三三

第十一章 蔚山沖の海戦……………三七
第十二章 リューリックの撃沈……………三二

第九編 遼陽の巻……………三四五

目次
第一章 遼陽の敵……………三五
第二章 三軍の連絡……………四九
第三章 黒木軍の右縦隊……………五〇
第四章 太子河左岸の占領……………五五
第五章 太子河右岸の激戦……………五九
第六章 名譽の岡崎山……………六二
第七章 激烈なる追撃戦……………六六
第八章 野津軍の戦況……………六六
第九章 奥軍の活動……………七五
第十章 首山堡の苦戦……………七八
第十一章 悲惨なる關谷聯隊……………八〇
第十二章 遼陽城の日章旗……………八四

第十編 沙河の巻……………三八八

第一章 敵軍の南下……………三八
第二章 大會戦前の小衝突……………三九
第三章 本溪湖隊の苦戦……………三九
第四章 軍旗山の奮闘……………三九

第五章 閑院宮殿下の御偉勳……………四〇
第六章 右翼軍の左縦隊……………四〇
第七章 旅團感狀の嚆矢……………四〇
第八章 三塊山の大夜襲……………四〇
第九章 中央軍の成功……………四九
第十章 左翼軍の進撃……………四三
第十一章 須永部隊の奇勝……………四七
第十二章 沙河の對陣……………四三

第十一編 旅順の巻……………四三六

第一章 旅順の包圍……………四三
第二章 勸降の軍使……………四六
第三章 第一回總攻撃……………四三
第四章 海鼠山の占領……………四七
第五章 『ステツセル』と『クロバトキン』……………四二
第六章 二子山と鉢卷山……………四四
第七章 一戸砲臺の由來……………四六
第八章 最後の總攻撃……………四三
第九章 決死隊の白樺隊……………四六
第十章 嗚呼二百三高地……………四七
第十一章 東鷄冠山の陥落……………四五
第十二章 旅順の開城……………四八

第十二編 奉天の卷(上)……………四八二

目

第一章	敵の中立地横行……………四八二	第二章	牛莊の陥落……………四八五
第三章	牛莊の回復……………四八九	第四章	種田枝隊の退却……………四九四
第五章	老橋の難戦……………四九六	第六章	依田部隊の苦闘……………四九九
第七章	蘇麻堡の亂撃……………五〇五	第八章	増援隊の運動……………五〇七
第九章	黒溝臺の回復……………五〇〇	第十章	大戰の準備……………五〇四
第十一章	城廠の敵襲……………五〇七	第十二章	清河城の占領……………五〇三

第十三編 奉天の卷(下)……………五二六

次

第一章	最右翼軍と右翼軍……………五二六	第二章	高臺嶺の激戦……………五二九
第三章	崩れ始めた敵の足並……………五三〇	第四章	右翼軍と中央軍……………五三六
第五章	萬寶山攻撃……………五三九	第六章	李官堡の難戦……………五四四

第十四編 日本海の卷……………五七一

目

第七章	右翼軍の急進……………五二一	第八章	最左翼の迂回運動……………五二四
第九章	秋山騎兵團の活動……………五二七	第十章	奉天占領と敵の敗北……………五三二
第十一章	我追撃と鐵嶺占領……………五三四	第十二章	滿洲軍の大成功……………五三六

次

第一章	波羅的艦隊の出航……………五三七	第二章	敵の計畫變更……………五七四
第三章	我が十二分の準備……………五七六	第四章	信濃丸と和泉丸の功績……………五八一
第五章	『皇國ノ興廢此一戦ニ在リ』……………五八四	第六章	第一戦の成績……………五八八
第七章	敵艦隊の敗走……………五九三	第八章	片岡艦隊の勇戦……………五九五
第九章	敵旗艦の最期……………五九八	第十章	水雷の奇襲……………六〇三
第十一章	敵旗艦の收獲……………六〇六	第十二章	空前の大成功……………六一二

第十五編 樺太の卷……………六一六

目

次

第十六編 凱旋の巻

第一章 樺太の由來……………	六六	第二章 幕府の樺太談判……………	六九
第三章 攻撃軍の上陸……………	六四	第四章 コルサコフ其他の占領……………	六八
第五章 ダアリネエの森林戦……………	六三	第六章 敵將以下の降服……………	六五
第七章 北部樺太軍の行動……………	六六	第八章 アレキサンドルスキーの占領……………	六二
第九章 我軍の追撃……………	六四	第十章 ルイコフの市街……………	六九
第十一章 我軍の急追撃……………	六三	第十二章 敵軍の降服……………	六五
第一章 沿海州の偵察……………	六四	第二章 北韓軍の活動……………	六三
第三章 洪水中の滞陣……………	六六	第四章 會寧方面の攻撃……………	六〇
第五章 平和風の由來……………	六三	第六章 兩國の媾和委員……………	六六
第七章 我が媾和條件……………	六〇	第八章 媾和の難關……………	六三
第九章 媾和の成立……………	六七	第十章 國民の激昂……………	六二

目

次

第十一章 大廟參拜……………	六五	第十二章 滿洲軍の凱旋……………	六九
----------------	----	------------------	----

目次完

明治天皇……………

陸海の諸親王……………

陸海の諸將軍(一、二)……………

旅順の占領…………… 渡邊春也筆

日本海の劇戦…………… 東城鉦太郎書

戦時畫集

金州城の夜襲●滿洲土民の歡迎●閉塞隊の活動●廣瀨中佐の猛進●決死隊の奮
闘●首山の苦戦●勇卒の進軍●露兵の暴行●旅順の明渡し●露都の暴動●騎兵
の突進●露艦の惨狀●勇士の火葬●軍使の出張●小村大使の着来、同大使の旅
館●國民の祝捷

訂校 少年日露戦史

巖谷小波

第一編 開戦の巻

第一章 戦争の原因

我が日本帝國の紀元二千五百六十四年、明治天皇の三十七年は、
全世界の歴史の中に、永く記憶すべき年であります。見給へ、我が
日本帝國は、彼の露西亞帝國を敵手に、正義の戦を起す事と成り、
即ち日本 天皇陛下は、紀元節の前日を以て、宣戦の詔敕を下だし

賜はりました。

是より先日本は、此年の二月六日を以て、愈々露西亞と交誼を絶ちますと、直ぐに軍艦を出して、朝鮮の仁川や、支那の旅順口に、露西亞の海軍と戦ひ、大いに敵を破りました。この通知を得た、日本國民の喜悅は、實に非常なもので、紀元節を壽ぐ國旗は、その儘戦勝を祝ふ國旗と成つて、津々浦々に至るまで、日本中が萬歳を唱へたのであります。

＊ 因 原 の 争 戦 ＊

さても我が日本は、何故露西亞と戦を初めましたか？元より戦と云ふものは、文明國の決して好まない事で、世界が平和であるならば、人間はまことに幸福なのであります。さればこそ、慈愛に富ませ給ふ我 天皇陛下は、常に御心を平和の爲めに用ひさせ給ひ、殊に支那朝鮮など云ふ、同じ東洋に在る國々の爲めには、何時も平和である様にと、そのみ望んで居らしたのであります。

★ 卷 の 戦 闘 ★

が、その平和を永く保つ爲めには、時と場合に依つて、平和とは全く反對な、戦をしなければ成らない事もあります。現にわが日本は、明治二十七、八年と、同じく三十三年と、二度まで支那と戦をしたことがありました。けれどもそれは、戦が仕たいから仕たので無く、全く平和の爲めに仕たので、その證據には、其時敵であつた支那と、今では大層仲好く成つて居ります。

所が彼の露西亞は、何も戦を好くのではありますまいが、兎自分勝手ばかりして、世界の平和を妨げましたから、平和を望む日本とは、何しても氣が合ひません。その上我が日本を、自分の國の一分一にも足りない、小さな國だと思ひまして、始終此方を侮つては、云ふ事を少しも聞かず、失敬な事を度々働きましたから、如何に辛抱強い日本も、遂に黙つては居られなく成りました。

されば今この戦の原因を、是から少しく述べませう。

第二章 三國の干渉

時は明治廿八年の事であります。我が日本帝國は、支那帝國に勝ちました。その時支那からは、有名な大臣李鴻章を、わざわざ日本へ送りまして、長門國下の關で、日本の大臣、伊藤博文や陸奥宗光と、和睦の談判を開きました。元より支那は敗けたのですが、其結果として、臺灣と遼東半島とを、日本へ割いて渡す事に成つたのです。

尤もこの土地は、日本の軍隊が押し渡つて行つて、大勢の命を棄て、澤山の血を流して、攻め取つた所ありますから、是を自分の方へ取るのに、何の無理がありませんか？

況して臺灣や遼東半島は、日本に一番近い土地で、自分の國を守る爲めには、なかく大切な所ありますから、是を自分の方へ取

三國の干渉

るのに、何の不思議がありませんか！

然るに彼の露西亞は、之を見て何と云ひましたか？

今までは日本と支那に、十分戦をさせて置いて、平氣で見物をして居ながら、此時に成ると口を出し、『臺灣の方はよいけれども、遼東半島を日本が取ると、東洋の平和の爲めに、決して善い事はあるまいから、早く還へしてしまふがよからう。』と、親切らしく世話を焼きました。而もこの事を、自分獨りで云つたのでは、效驗が無いと思ひましたか、同じ歐羅巴の、獨逸と佛蘭西を仲間に誘ひ、三國揃つて斯う云ひ出しました。これが名高い三國干渉——干渉とは餘計な世話を焼く事であります。

三國の干渉

そこで日本は、この三國の干渉に會つて、決して面白くは感じませんでした。けれども其時の戦は、全く朝鮮國の爲めに、支那の無禮を懲らすのが趣意で、その支那が自分の罪を悔ひ、朝鮮の獨立を

★ 三 國 の 干 渉 ★

認めた上は、もはや趣意は徹つたのですから、その上外國の注意に逆つてまで、土地を取るには及ばないと云ふので、折角取つた遼東半島を、素直に支那へ還附してやり、これで東洋は平和に成りました。

が、若しそれを還へさなかつたら、東洋の平和は果して破れましたらうか？

勝つた日本に對して、敗けた支那が土地を渡すのに、元より不思議は無いので。日本がまたその土地を、立派に治めて行くならば、

かつして平和の破れる理はありません。それを彼是云つたのは、全く露西亞の自分勝手。成る程その時日本が、露西亞の云ふ事を聞かずに、遼東半島を占領し、その云ふ事を聞かないのを怒つて、露西亞が喧嘩を仕掛けたなら、きつと平和は破れましたらう。が、それは露西亞が自分で破るので、日本に

★ 開 戦 の 卷 ★

何の咎も無い事です。

ですからその時も、おめく彼等の干渉を聞いて、手を退かなくともよいのでしたが、何分あの頃は、支那と戦をしたばかりで、軍人も國民も、大分疲れて居た時でしたから、この上露西亞と戦をして、又人を殺したり、金を使つたりするのは、あまり望ましい事でも無いと、残念ながら虫を殺して、彼等の云ふ事を聞いたのであります。

あゝ、彼の干渉をお容れに成つて、直ちに遼東をお還附に成る事を、詔敕に依つて御示しに成つた 明治天皇陛下の御心の中、今から推し奉るさへ、恐れ多い事ではありませんか。

第三章 露西亞の無法

日本に一旦取られた遼東半島は、露西亞の干渉によりまして、再

び支那へ還附されました。それを思へば、露西亞は支那の恩人であり
ります。

所がその恩人は、類りにその恩を着せて、支那を自分の方に手な
つけ、そしてその領分を、段々自分の有にしかけました。

日本に遼東を還附させたのは、東洋の平和の爲めでは無く、後に
自分が取らうと云ふ爲めであつたのは、今更云ふ迄もありません。

されば露西亞は、やがてその正體を現はして、支那の内地へ、勝
手に自分の方の鐵道を伸ばし、また遼東半島の端の、一番大切な港
である、彼の旅順口をば、廿五年間借りうける事にしました。

是より先、露西亞は西比利亞の東の端に、ウラジヤストックと云
ふ港を持つて居ります。けれどもこの港は、あまり寒い所にあるの
で、冬に成ると氷に閉ぢられて、まことに不便でありますから、そ
こで朝鮮か遼東半島に、何うかして良い港が欲しいと、常から覗つ

て居た所です。で、この旅順口を借り受けると、直ぐに砲臺を構へ
たり、船渠を掘るたりして、十分に港を固め、また軍艦を此處に置
いて、何時何處の國と戦を初めても、少しも不便の無い様にしまし
た。

それでも支那は弱いものですから、これに小言を云ふ事は出来ま
せん。それをまた露西亞の方では、好い氣に成てつけ上り、鐵道守
備と云ふ名目で、支那の内地へどん／＼兵隊を送りました。これは
そも／＼何の爲めせう？

まことに彼の遼東半島は、日清戦争の當時、彼の大山大將の率
た、第二軍の進んだ所で、獨眼龍と渾名された山地中將が、骨を折
つて占領した所なのであります。それを只の一言で、元の支那へ還
へさせて置いて、それから二三年経つか経たない中に、今度は自分
が借り込んでしまふと云ふ、露西亞の自分勝手には、誰も驚かずに

九

は居られますまい。

それでもまだ日本は、ちつと蟲を殺して、黙つて見て居りますと露西亞はますます増長して、遂には容赦の成らぬ舉動をいたしました。

それは明治三十三年の、北清事件の後であります。

抑々北清事件と云ふのは、我が日本を初め、英吉利、獨逸、露西亞、亞米利加、佛蘭西、伊太利、奧太利などの各國が、それ／＼兵隊を出して、聯合軍を組み、支那に起つた義和團の亂を、討ち平げた戦の事です。

この戦争の原因は、云はゞ支那の開けない所にあるので。諸外國の人々が、支那の内地に入り込むのを、義和團と云ふ、頑固な黨派の者が腹を立て、不意に謀反を起しては、公使館を焼いたり、その役人を殺したりしましたので、何の國でも承知せず、そこで聯合軍を出して、一つには自分達の國の爲め、また支那の國の爲めに、

＊ 法無の亞西露 ＊

その謀反人を征伐したのであります。
で、元より敵手は規律の無い義和團、此方は揃ひも揃つた、文明國の軍隊ですから、間も無く聯合軍の勝に成つて、戦は濟んでしまひました。

★ 卷の戦闘 ★

けれども尙用心の爲めに、何處の國でもまだ兵隊を置いて、居留人民を保護して居りましたが、その中に、和睦の談判が出来、支那からは各國へ、それ／＼償金を出しまして、無事に治まりましたから、何處でもその兵隊を、それ／＼本國へ引揚げてしまつたのです。所が露西亞ばかりは、初めから滿洲を占領して、容易に兵隊を退きません。退かない許りか、尙その數を増す様子ですから、それは宜しく無からうと云ふので、日本から度々掛合ました。

それでも露西亞は、日本なぞが何を云ふかと、一向耳にも入れません。否、耳に入れない事は無いので、聞く事は聞きますが、只そ

の言葉に従はないのです。否、言葉には従ひますが、決して事實に行はないのです。

何うでせう？ 十年前に彼から受けた干渉は、日本で直ぐに聞いてやりました。それに今此方から爲る注意を、少しも先方では用ひません。

それも先方の干渉は、後に自分が取らうと云ふ野心の爲め。また此方の談判は、飽くまでも東洋の平和の爲めです。それに露西亞は何時まで経つても兵を退かず、却つて段々進んで来て、遂には朝鮮の國までも、その弱いのに付け込んで、自分が乗り取らうとしました。

若し彼の露西亞が、滿洲を占領し、ついで朝鮮を押領したら如何でせう？ その時こそわが日本は、まるで門や垣の無い家同然、何時盗人に入られるか知れませんかから、こんな危険い事は無いので

＊ 法無の亞西露 ＊

す。

まことに滿洲は、東洋に取つては門や垣で、日本はその母屋であります。その母屋を安全に置かうと云ふのに、門や垣の壊されるのを、懐手して見て居られませうか？

それにつけても、人の家の門や垣を、勝手に壊したり乗り越えたりする、露西亞の失敬な舉動は、もう免して置く事は出来ません。かう成つては日本も、只に東洋の平和の爲め許りで無く、自分の國の安全の爲めに、刀を抜かすには居られなく成りました。

そこで我が日本政府は、今まで外務大臣小村壽太郎や、公使栗野慎一郎を以て、露西亞と談判させておきました。遂に二月六日、一トまづ交誼を絶つ事に成り、已に交誼を絶つ以上は、是から自由行動を取ると、世界中に觸れました。自由行動とは、取りも直さず、兵力に訴へて、戦を初めると云ふ事でありませう。

★ 卷の戦闘 ★

するとまた世界でも、英吉利や、亞米利加や、獨逸や、佛蘭西や、其他の國々は、この事を聞きまして、皆局外中立に成りました。局外中立とは、常から日本とも、露西亞とも、同じ様に交際して居たが、今二國が戦争をする場合、自分達は間に立つて、何方の加勢も仕ないと云ふ事です。

あゝ我が日本は、かう云う理で露西亞と戦をしたのです。思へば十年前、支那と戦をした時は、朝鮮に對する支那の無禮を懲らし、朝鮮の獨立を扶ける爲めでした。また今度の戦は、滿洲を支那へ還へさせて、露西亞の無法を誡める爲めです。一度ならず二度までも、隣の國の保護の爲めに、自分の軍隊を出すと云ふ。この日本の俠氣には、誰が感心せず居ませう。

まことにわが日本は、正義人道の味方と成つて、文明の仇、平和の敵なる、彼の露西亞を討つたのであります。

第四章 露西亞は何んな國？

抑々この文明の仇、平和の敵なる露西亞とは、どんな國でありませうか？

試みに東半球の地圖を開いて見ますと、その歌羅巴の北東の方から、亞細亞の北部一面に渡つて、大層大きな國があります。これが露西亞帝國なのです。

此國は、今から三百年ほど前に、ペートル大帝と云ふ、豪い天子が現はれまして、近所の國々を征め取つて、歐羅巴一番の、大きな國にしたのであります。その昔は、ノルマン人と云ふ人種が、初めて土地を開いてから、段々立派な國になりました。

然るにこの露西亞國は、位置があまり片寄つて居るので、他の文明の國々と、交通するのに便利が悪く、随つて國を富ますのに、甚

だ勝手が悪いのです。

御覽なさい！露西亞と云ふ國は、その北の方にばかり、海が開いて居りますが、西の方のバルチック海も、南の方の黒海も、皆出口が狭いものですから、もしもこの露西亞が、船を大西洋や太平洋に出して、自在に八方へ通はうとする時には、何うしても他の國の厄介に成るか、さも無ければ土地を広げて、便利な位置を占めるより他はありません。

露西亞は何んな國

そこまづ東の方は、西比利亞を段々開いて行つて、永い間骨を折つて、漸くウラジヤストクを設けましたが、此處もちと北過ぎるので、あまり好い港には成りませんでした。さうかと云つて西の方には、歐羅巴の強い國が澤山あつて、手の伸ばし様がありませんから、とうとう弱い亞細亞へ向つて、勝手に足を踏み込んで、何時の間にか滿洲を占め、果は遼東半島も取つて、

★ 卷の戦闘 ★

其處の旅順口を自分の有にした許りか、大連灣の入口に、新に青泥窪と云ふ港を開き、これで支那海、日本海を初め、太平洋の交通も自在に出来る様に成つたと、大きに喜んで居たのであります。

成る程彼露西亞に取つては、これは喜ぶべき事でありませう。然し我東洋に取つては、甚だ悲むべき事なのであります。

一體露西亞と云ふ國は、ペートル大帝の志を繼いで、國の領分を段々押し廣げ、遂にはこの全世界を、一手で支配すると云ふのが、その目的なのであります。

全世界を一手で支配する。それは心しも悪い事ではありませぬ。否、若し立派な文明國があつて、その手で平和に世界中を治め、そして人間の幸福を謀るならば、こんな結構な事はありますまい。

けれどもそれは容易な事でありませぬ。まして露西亞の様な、只土地を廣める事ばかり知つて、之をよく治める事を知らず、自分勝

手な事ばかりして、他人の都合を少しも關はない、亂暴な行り方では、誰が黙つて従つて居られませう？ これを文明の仇、平和の敵と云つても、決して無理はありません。而も弱い者を苛めたり、温和い者を詐したり、乃至約束に反いたりして、我儘ばかり働かれては、どうしても之れを壓へつけて、心を改めさせなければ成らないのです。——日本の茲に奮ひ起つたのも、なんと正當な事ではありませんか。

第五章 文明と野蠻の戦

あゝわが日本帝國は、斯の如くして露西亞を敵に取りました。是より先わが帝國の、外國と戦争した事は、一度や二度ではありません。

遠くは神功皇后の三韓征伐、中頃北條時宗の元寇の役、下つては

豊臣秀吉の朝鮮陣、また明治に成つてからも、日清戦役、北清事件と、已に二度までありました。

三韓征伐、朝鮮陣、この二つは我々の祖先が、自から進んで外國を討ち、また元寇の役は、居ながら外來の敵を打ち拂つたので、共に國威を輝かしたには相違ありませんが、畢竟日本一國に取つて、大切な事件であつた丈で、世界の歴史の上からは、別に價値のある者では無かつたのです。

また此間の日清戦役、及び北清事件の如きも、成る程日本と云ふ國が、東洋で一番進んだ國、一番強い國と云ふ丈は、世界にも知れ渡りましたらう。が、それとても、矢張り東洋丈の事で、全世界の歴史には、別に大した影響も與へませんでした。

それは何でありませうか？ 畢竟その敵手が、東洋の國同士であつて、残念ながら世界各国からは、共に十分の文明國とは、まだ認

められなかつた故です。
然るに今度の敵手は何うでしたか？ 兎も角も歐羅巴の中で、國も一番大きければ、兵も一番強いと云はれた、彼の露西亞帝國であります。

＊ 戦の變野と明文 ＊

そして戦争の目的は、一旦日本の占領した土地を、威しつけて還へさせて、後に自分が押領してしまつたから、その遺趣を晴さうなど、云ふ、小さな事にあるのでは無いので。全く平和の爲め、人道の爲めに、露西亞の心得違を懲さうと云ふのですから、實に立派なものであります。

さればこれを一言に云ふと、この日露の戦争は、文明と野蠻の戦です。——文明の方が勝つならば、世界は文明の世界と成ります。野蠻の方が勝つならば、世界は野蠻の世界と成ります。この世界の人間として、果して何方を望むでせうか？

★ 卷の戦闘 ★

是に於て世界各国は、何れも目を皿の様にして、この戦争を見て居りました。それはこの勝敗が、やがて世界各国に、非常な影響を及ぼす故です。

して見ると日本は、只日本の爲め、東洋の爲めに、露西亞を敵手にしたのでは無く、更に進んで世界の爲めに、この大國と戦ふのであります。

北清事件や、日清戦役や、さては朝鮮陣、元寇役、乃至三韓征伐に比べて、今度の日露戦争の、遙に大切である事は、元より云ふまでもありますまい。

第六章 艦隊の出發

さても我が日本は、露西亞との談判が、段々むづかしく成つて来て、とても穩かな話では、事が纏まらないと思ひましたから、兼て

その用意をして、艦隊を佐世保の軍港に集め、イザと云へば直ぐに出られる様に、ちやんと支度が出来て居りました。

所へ談判が破れましたから、日本政府は電報を以て、一方には露西亞に在る公使館を初め、總て露西亞に居る日本人に、「急いで本國へ引揚げろ！」と云つてやり、一方には佐世保の艦隊へ、「直ぐさま露西亞を攻めろ！」と命じました。

それと同時に、日本に居る露西亞の公使も、東京の公使館を引き拂つて、國へ歸る事に成りましたから、明治天皇は、わざ／＼公使ローゼンを召して、宮中で拜謁を賜はり、またその途中をも、十分に保護を與へて、怪我の無い様にして遣はせと云ふ、難有い御思召でありました。

ウラジヤストックや旅順口から、日本人が引揚げて来たのと同入れ違つて、日本帝國の艦隊は、敵地をさして出發しました。

＊ 艦 隊 の 出 発 ＊

此時日本艦隊には、三笠、初瀬、朝日、敷島、富士、八島の六大战艦を初めとして、浅間、常磐、出雲、磐手、吾妻、八雲、千歳、高砂など云ふ巡洋艦。また日清戦争の時、黄海や威海衛で功勞を顯はした、吉野、高千穂、浪速、秋津洲などもあり、それに水雷驅逐艇、水雷艇などが、澤山備はつて居るのです。

また之を率ゐる將軍には、梨羽時起、出羽重遠、三須宗太郎、瓜生外吉の四少將を、各戦隊の司令官にして、その上の司令長官には、上村彦之丞や、東郷平八郎が居りました。この東郷中將は、十年前の日清戦争には、浪速の艦長をして居りましたが、豊島の沖で支那の軍艦に出會ひ、初めて火蓋を切つたと云ふ、豪い將軍なのであります。

★ 戦 闘 の 巻 ★

更に記憶せねば成らぬ事は、この艦隊の將校の中に、恐多くも親王殿下が、御三方も加つて居らしつた事です。即ち 東伏見宮依

仁親王、華頂宮博恭王、山階宮菊麿王と、この三殿下なのであります。

さても東郷司令長官は、開戦の命令を受け取りますと、元より待ち構へて居た所ですから、何の猶豫がありません。直さま、司令官や艦長を、旗艦三笠に集めまして、それ〴〵計略を定め、まづ全隊を四つに別けて、二月七日の午前一時より、同じく午後一時までの間に、勇み立つて佐世保を出しました。

此時佐世保鎮守府司令官の、鮫島海軍中將員規は、わざ〴〵港の出口まで見送り、東郷司令長官に向つて、「無事の凱旋を待つ」と信號しますと、東郷司令長官からも、同じく信號を以て、「必ず成功致す」と誓ひ、見送る人、見送られる人が、等しく唱へた萬歳の聲は、海も山も振ふ許り。その中を艦隊は列を爲して、日の丸の旗を汐風に翻へし、黒煙を吐き、白浪を蹴立てつゝ、徐々と進んで行く勇まし

＊ 發出の隊艦 ＊

さ！これには如何なる悪魔も鬼神も、尾を巻いて逃げる外はありません。ますまい。

第七章 仁川の海戦

中にも瓜生少將の率ゐた、聯合艦隊の第四戦隊は、第十二師團の先發隊を乗せた、運送船三艘を護衛しながら、やがて朝鮮の木浦沖で、他の艦隊と一トまづ別れて、自分仁川へと急ぎました。是は先に仁川を占めて、此處から陸兵を揚げる爲めなのです。

所がこの仁川には、この前から、千代田艦が来て、居留民の護衛をして居りましたが、また露西亞の方からも、ワリヤークにコレ一ツと云ふ、大きな軍艦が二艘来て居て、双方睨み合つて居りました。若し此時に、日露の談判の破裂した事が、此の港に聞えたなら、露西亞方の二の軍艦は、千代田一艦を狭撃にして、酷い目に會せた

★ 巻の戦闘 ★

＊ 戦 海 の 川 仁 ＊

かも知れませんが。まことに危険い事であつたのです。
けれども千代田艦は、敵の油断を見すまして、夜の中に港を脱け出し、沖まで来て居る第四戦隊に、港の中の様子を告げ、またコレイツの出で来る事を知らせました。
そこで瓜生司令官は、まづ水雷艇の鳩、雉子を先に立て、それに浅間をつけて進みますと、コレイツはそれを見て、忽ち大砲を撃ち初めました。とても敵はぬと思つたものですから、直ぐまた港へ逃げ込んでしまひました。
これで露西亞の海軍の手際も、大方解つてしまひましたから、もう恐れる事は無いと、千代田、高千穂、明石の三艦は、運送船を護衛しながら、どんく港の中へ進んで、陸兵を揚げ初めました。敵の二艦は其處に居ながら、少しも手出しをする事が出来ず、只餘所の國の軍艦の陰に、小さく成つて隠れて居りました。

★ 巻 の 戦 闘 ★

やがて陸兵の上陸も、首尾よく済ましました所で、瓜生司令官は敵の軍艦へ、わざく使をもつて、「速く此處を退いてしまへ！さも無ければ撃ち沈めるぞ。」と、かう云つてやりました。
かう成つては露西亞の軍艦も、もう覺悟を極めなければ成りませぬ。
そこでコレイツが先に立ち、ワリヤークは之についで、仁川の港を出て見ますと、其處の月尾島の西の方に、我が第四戦隊は、浅間、浪速、新高、高千穂、須磨、明石の六巡洋艦に、水雷艇八隻が附きました。正々堂々と陣を張つて居りますから、是に肝を吞まれましたか、逃げやうと云つても逃げられませぬ。遂に死物狂になつて、凡そ三十分ばかりの間、劇しく砲火を交へたのであります。
その中に逆も敵はなくなつて、二艘ともまた逃げ出しましたが、ワリヤークは途中で沈んでしまひ、コレイツはまた、その後自分で

火薬庫に火を掛け、恐ろしい勢で爆發して、これも底の藻屑に成つてしまひました。これは實に、二月九日の事であります。

この戦で、日本には一人の怪我人もありませんでしたが、露西亞方は可哀さうに、死んだ者が四十人に、怪我をした者が六十四人ありました。尤もその怪我人は、大方此方の病院へ入れて、親切に手當をいたしましたので、皆大層喜んで云ひます。

日露戦争の序幕は、かう云ふ風で仁川に開かれ、そして日本の大勝利に成りました。

まことにこの勝利には、只陸兵を朝鮮から揚げるのに、大きな便利を得たばかりで無く、この港に露西亞の軍艦を無い様にすれば、もはや朝鮮から南の方の海は、日本の船が自由に通つて、少しも危険い事は無いのですから、此位都合の好い事はありません。

第八章 旅順の攻撃

茲にまた、第四戦隊に別れた本艦隊は、東郷中將の指揮の下に、舵を南へと取つて、やがて近よつて來ましたのは、渤海灣の入口にある、例の旅順口でありました。

あゝ旅順口！ 此處は露西亞が、嘗て日本から詐し取つた所で、今は彼が東洋艦隊の根據地と成り、樞東總督のアレキシーフも、常に住んで居る所であります。

さればその軍艦にも、戦闘艦にはツエザレキッチ、レトキザン、ベトロバウロフスクを初めとして、驅逐艦や、水雷艇も澤山持ち、また砲臺や探海燈まで、十分嚴重に備はつて居りますから、これを攻め落とすと云ふ事は、なか／＼容易ではありません。

そこでまづ最初には、驅逐艦隊を以つて、不意に夜襲を仕かけた

✿ 旅 順 の 攻 撃 ✿

のです。で、十八艘の驅逐艦から、それ／＼水雷を打ち放しますと、敵は艦からも砲臺からも、頻りに彈丸を降らしましたが、あまり此方に中りません。却つてツエザレキッチだのレトキザンだの云ふ、大切な軍艦を撃ち破られ、その他の艦にも大分損害を受けて、這ふ這ふの體で逃げ込んでしまひました。

さてこの襲撃で、まづ敵の鼻を挫ぎましたから、今度はまた一時に行つて、その荒肝を抜いてくれやうと、三戦隊が一所に成つて、東郷中將眞先に立ち、總攻撃と云ふ事に成りました。

時に二月九日の午前、司令長官東郷中將は、部下の將校達と一所に、シャンペンの杯を舉げて、天皇陛下の萬歳を唱へ、それから進んで行つて見ますと、敵はもうそれと見て、砲臺からドン／＼撃ち出しました。

けれどもその間が遠くて、折角撃ち出した彈丸も、皆海へ落ちて

★ 戦 闘 の 巻 ★

しまふばかりですから、無駄な事をするものだと、味方は之を笑ひながら、まだ此方の火蓋は切らず、やがて七千五百メートルまで進んで、初めて大砲を撃ち初め、陸地から三千メートルの所まで、勢よく向つて行きまして、散々敵を惱ました揚句、一トまづ引揚げてしまひました。

此時東郷司令長官は、一等戰闘艦三笠を旗艦にして、自分が之に乗つて居ましたのを、敵もこれを知つて居た者か、主に三笠を目がけて撃ちましたが、參謀松村大尉の怪我をした外には、誰一人戦死したのもありませんでした。

その代り富士艦では、砲術長の山中少佐と、分隊長心得の三浦中尉とが、勇ましく戦死を遂げ、また初瀬艦では、梶村少尉候補生が、敵彈に中つて死にました。

尤も此外に、怪我をしたものは、將校、下士、兵卒とで、二十人

餘りありましたが、艦は少しも損じなかつたのです。それに引かへて露西亞方は、初の二度の戦闘に、酷く艦隊を傷けられましたから、その後はもう港内に立て籠つて、滅多に外へは出なく成りました。

一度ならず二度までも、仁川と云ひ旅順と云ひ、共にわが海軍の目覺ましい功勞を顯はしましたから、それを聞いた日本國民の歡喜は、實に非常のものでありました。

で、二月十日の晩には、東京市中の有志の者が、この戦勝を祝ふ爲めに、提灯行列を行ひまして、萬歳々々を唱へましたが、その勇ましい萬歳の中に、宣戰の大詔は下つたのであります。

第九章 宣戰の詔勅

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠實勇武

なる汝有衆に示す

朕茲に露國に對して戰を宣す朕が陸海軍は宜く全力を極めて露國と交戰の事に従ふべく朕が百僚有司は宜く各々其の職務に従ひ其の權能に應じて國家の目的を達するに努力すべし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺算なからんことを期せよ惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤くして以て東洋の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せずして永く帝國の安全を將來に保障すべき事態を確立するは朕夙に以て國交の要義と爲し且暮敢て違はざらんことを期す朕が有司も亦能く朕が意を體して事に従ひ列國との關係年を逐うて益々親厚に赴くを見る今不幸にして露國と釁端を開くに至る豈朕が志ならんや帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非ず是れ兩國累世の關係に因るのみならず韓國の存亡は實に帝國安危の繋る所たればなり

然るに露國は其の清國との明約及列國に對する累次の宣言に拘
はらず依然滿洲に占據し益々其の地歩を鞏固にして終に之を併
呑せんとす若し滿洲にして露國の領有に歸せんか韓國の保全は
支持するに由なく極東の平和亦素より望むべからず故に朕は此
の機に際し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恒久に維持
せむことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに互りて
屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之れを
迎へず曠日彌久從に時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し
陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せしめむとす凡そ露國が
始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし露國
は既に帝國の提議を容れず韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の
國利は將に侵迫せられんとす事既に茲に至る帝國が平和の交渉
に依り求めむとしたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むる

の外なし朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚頼し速に平和を永遠に
克復し以て帝國の光榮を保全せむことを期す
御名 御璽

明治三十七年二月十日

各大臣連署

今これを解り易く譯して見ますれば、

「天の佑を持つて、幾萬年も動かぬ位に居る、大日本國の天子が
忠義で、勇氣のある汝達に、今云ひ渡す事がある。
朕は今度露西亞と戦争を初めやうと思ふ。朕の陸軍や海軍は、
出来る丈力を盡して、露西亞征伐に向うてくれ！ また役人共
は、それ／＼の役目に付いて、他の國に笑はれない様に、落度
無く働かねば成らぬぞ。
一體朕は、平和の間に國を進め、他の國とも仲を好くして、こ
の東洋の天下を、何時までも穩にし、他の國の迷惑に成らない

様に、自分の國も安らかに立つ様にと、何時でもその事のみ考へて居る。されば役人共も、よく朕の意をうけて、その役目を守り、他の國々とも段々親しく成つて來た。それに今度、露西亞と戰爭を開くのは、まことに面白く無い事である。我日本は、どうしても朝鮮を守り立て、行かないと、つまり自分の國が危く成る。それに彼の露西亞は、支那と約束した事やまた他の國々に云つた言葉を忘れ、何時までも滿洲に陣取り、遂には此處を乗取らうとして居る。若し滿洲が露西亞の有に成れば、自然朝鮮も立ち行かなく成つて、折角の東洋の平和も、永く續かない様に成つてしまふ。それぢやから朕は、何でも穩に話をつけて、東洋の天下を安らかにしたいと思ひ、その向きの役人に云ひつけて、いろいろ相談をさせたが、露西亞は少しも譲り合ふ氣は無く、ぐすくと日を延ばして、上部に平和を

望むやうに見せ、其實は陸海軍の兵隊を増して、我國迄も抑へ付けやうとする。實に彼の露西亞は、初めから平和を望むとは思はれないのぢや。さればこそ、我國の云ふ事を聞かず、朝鮮をまことに危い物にして、我國の利益をも損はうとして來た。もうかう成つては、穩かな手段で纏めやうとした事も、勢ひ戰爭を初めなければ、此方の受合つて居る東洋の平和が、とても保ち切れなく成つた。よつて朕は、汝達の忠義と勇氣とを頼んで、速く東洋の平和を取り返へし、我が大日本帝國の威光を、世界に示さうと思ふのぢや。』
と、かう云ふ事に成るのであります。
實にこの大詔を、よく拜讀して見ても、露西亞の我國に對する無禮は、決して勘辨は成らぬので、また日本の戰を初める趣意は、全く東洋の平和にある事が、明かに解るのであります。

この詔勅が出ると同時に、大本營は宮中に置かれ、恐らくも明治天皇は、大元帥として此處へ御出御で、親しく戦況を御覽になり、また戦略をも聞召す事に成りました。

此時大本營の幕僚には、誰が居たかと云ひますと、陸軍には、參謀總長大山巖、同次長兒玉源太郎、海軍には、軍令部長伊東祐亨、同次長伊集院五郎、その他戦術に長け、膽略に富んだ、海陸に選抜の將校達が、一生懸命に働きました。

第十章 國民皆兵

是より先、日本がいよいよ露西亞に向つて、戦争を初める事に極まりますと、やがて動員令が出て、全國にある陸海の軍人は、皆戦争の支度をして、陸軍は師團へ、海軍は鎮守府へと、召し集められました。

一體日本の男は、満二十歳に達しますと、皆軍人に成つて、國を守る義務を持つて居るのです。

ですから自體の丈夫な者は、少くも一年、長くは三年から、四五年迄も、兵役と云つて、軍隊の教育を受けなければ成りません。

が、その年限が切れると、今度は豫備の軍人に成り、また各自の家に歸つて、平常の職に就くのであります。

所へ此の動員令が出ますと、商人ならば算盤を棄て、百姓ならば鋤を放し、直ぐにまた兵營に入つて、軍人に成らなければ成りませんから、若し自分丈の都合を云へば、こんな迷惑な事は無く、またその家族の者から見ても、まことに困る話であります。

それが、天皇陛下の爲め、日本帝國の爲めだと成ると、自分の都合や家族の迷惑は、少しも考へて居る者はありません。皆勇み進んで召集に應し、先を争つて兵營へ駆けつけます。と家族の者や友人

も、皆之を祝ひまして、賑かにこれを見送りました。

またかう云ふ人達が、汽車や船で國を立つ時には、知る者も知らない者も、旗を押立て、提灯を振り、聲を限りに萬歳を呼で、その健康を祝し、その出陣を壯にしました。

成る程其別離に臨んで、涙を流した者もありませう。が、その涙は、別離が悲しくて泣くと云ふ、女々しい涙では無く、尙も男子と生れて、國家の爲めに働けると云ふ、その身の面目を喜んだ、嬉し涙に過ぎないのであります。

昔は戰場へ出る者は、只武士ばかりであつたのです。で、その武士にこそ、義氣も勇氣もありましたらう。然し百姓や町人は、只利益を目的にして居れば、それで済んだものでした。

然し今日では、百姓でも商人でも、イザと云ふ場合には、皆戦争に出なければ成りませんから、随つて義に勇む心は、軍人ばかりの

専有物で無く、所謂日本魂と云ふものは、日本人と云ふ日本人が、誰も皆持て居るのであります。

第十一章 舉國一致

一方に動員令が出ますと、一方には國債の募集が初りました。國債とは、政府が人民から金を借りる事で、元よりこれ程の大戦をするには、費用が大層にかゝるのですから、何うしても國債を募らなければ成りません。

で、國債は凡て三億圓、その中二億圓を日本の内地で、残りの一億圓を、外國で集める事に成つたのですが、元より國の爲めには命さへ、決して惜まない日本人ですから、何うして金を惜みませう。我も／＼とこれに應じまして、忽の中にその金額が、募つた額の四倍にも成りました。

＊ 致 一 國 舉 ＊

また外國に置きましても、この國債の募集を聞きますと、先を争つて金を出し、是もまた暫時の間に、二三十倍の多額に上つたのです。是と云ふのも、全く日本の兵が強くて、最初の戦に勝利を占めた爲めとは云へ、全く今度の戦争が、日本の方に理があつて、文明の爲め人道の爲めに、俠氣を出して大國を壓ると云ふ、日本の勇氣に感心した故です。

政府はまた、國債を募集すると同時に、軍資金の献納や、恤兵費の寄附を許しますと、さアまた此の方にも、國民は皆勇み進んで、それ／＼身分に應じた金額を出し、少しもこれを惜みませんでした。戰場に出た兵士が、命を國に捧げて、一生懸命に働くのも、内地に残つた國民が、金を政府に献じる爲めに、一心不亂に稼ぐのも、その志に變りは無いので、共に君に盡し、國に盡す、日本魂の他はありませぬ。

★ 谷 の 戦 闘 ★

而も日本國民は、只に君に忠に、國を愛する許りでは無く、その同胞にも亦親切で、自分の身を顧みないでも、友の爲めに働かうと云ふ、美しい心を持つて居りますから、此が種々な會合に成つて、戰場に出て居る軍人に、親兄弟や留守宅の事で、餘計な心配の入りぬ様に、出来る丈の扶助をしました。

また女の方でも、此際奮ひ立つて、或る者は看護婦の稽古をしたり、或る者は繃帯を製へたりして、これもその身相應に、戦争の手助を怠りませぬ。

この通り、上も下も、男も女も、何れも心を一つにして、國の爲めに力を盡します。これを舉國一致と云ひまして、開闢二千七百年以來、一つ系統の天皇陛下を戴き、一つ系統の國民で堅めて居る、我が日本帝國で無ければ、容易に見る事は出来ない事です。

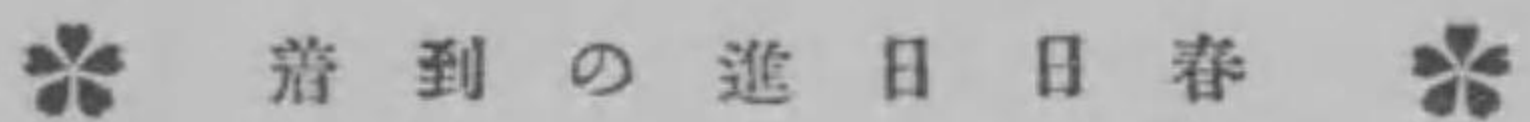
第十二章 春日、日進の到着

さて、仁川や旅順に於ける、わが海軍の勝報を聞いて、喜び勇んだ我が國民は、更に喜ぶべき事に接しました。それは他でもありません、春日に日進と云ふ、新しい立派な軍艦が、更にわが手に入つた事でありませす。

一體この軍艦は、初め南亞米利加のアルゼンチン國から、伊太利に注文してあつた物です。

二つとも姉妹艦と云つて、同じ形の巡洋艦であります、戦艦同様に、鋼鐵が十分張つてあり、大きさが七千噸餘りもあつて、その上大砲も新式の、力の強いのが付いて居ますから、まづ今までの日本には、まだ見る事の出来なかつた艦です。

それを日本は、アルゼンチン國へ掛け合つて、此方へ譲つて貰ひ



春日日進の到着

まして、仕事をはやく仕上げさせ、一月の初に伊太利を發して、それから日本へと廻りましたが、何しろもうその頃は、歐羅巴の方でも、日本と露西亞との間に、談判が遂に破裂して、今にも戦が初まると云ふ、噂の頻りに聞えた時分でしたから、この艦を預つて來た者は、實に心配でありました。

萬一その途中で、露西亞の軍艦にでも取りまかれて、撃壊されるか、分捕されでもしたら、それこそ大變でありますから、用心に用心して來ましたが、幸ひに何の怪我も無く、旅順の海戦があつてから一週間目、即ち二月十六日を以て、目出度く横須賀の軍港に着きました。

元より海國の日本、まして今戦争を初めた所へ、この立派な軍艦を得たのですから、國民の喜悅は一方ならず、すぐに此艦の乗組員を、日比谷の公園に招きまして、盛大な迎歡會を開きました。



★ 卷の戦闘 ★

其處でこの二艦には、新に乗組員が極まりまして、直ぐに戦争の支度を調べ、間もなく戦場に向ひましたが、敵は最初の戦争で、已に大切な軍艦を、三四艘も失つて居りますのに、それに引かへて我軍には、新たに好い軍艦が二つ加はつたのですから、その士氣の振つた事は、旅順口もウラジヤストクも、もはや手に入れたほどの意氣込。まことに頼もしい有様であります。

第二編 決死隊の巻

第一章 日韓の條約

日とは日本の事、韓とは韓國、即ち朝鮮の事であります。この日本と朝鮮とは、明治三十七年二月二十三日を以て、議定書を取り換はし、新たに條約を結びました。この條約に依りますと、

第一に、わが日本は、今日から此朝鮮と、何時までも親しく交はつて、永く東洋の平和を保ち、また朝鮮は、我が日本を信用して、此の忠告を屹度用ひる事。

第二に、日本は、朝鮮國の皇室を、親切に世話をして、永く安全に立て、おく事。

第三に、日本は、朝鮮帝國の獨立を扶け、又その土地を荒され



金州城の夜襲

＊ 日 韓 の 條 約 ＊

ぬ様にする事。

第四に、萬一外の國から戦を仕掛けられたり、また國內で謀反の起つた時には、日本は直ぐさま兵を出して、朝鮮帝國を守ると云ふ事。またその場合には、日本は戦をする都合に依つて、朝鮮の土地を自由に使ふ事の出来る事。

第五に、此兩方の國は、お互ひに相談をしてからで無ければ、別にこれと同じ様な約束を、他の國と結んでは成らない事。

第六に、尙この約束に付ての委しい事は、日本の全權公使と、朝鮮の外務大臣とが寄合つて、然るべく相談する事。

と、この六ヶ條なのであります。

一體日本と朝鮮とは、一番近く隣り合つた國ですから、互ひに仲よく交はつて、相扶けなければ成らないのは、元より云ふ迄も無いのであります。



閉塞隊の活動



滿洲民衆の歓迎

★ 卷の隊死決 ★

ですから日本は、疾うから斯云ふ條約を、結び度いと思つて居るのですが、何時も邪魔する者があつて、どうも思ふ様に出來ませんでした。

その邪魔をする者と云ふのは、云ふまでも無い彼の露西亞でした。露西亞は自分の國の大きいのを鼻にかけ、朝鮮の國の弱いのを見抜いて、或時は威かし、或時は誑して、段々に朝鮮を、自分の方へ抱き込もうとしたのです。

また朝鮮は、自分が弱い者ですから、何うしても強い國に使らなければ成りませんが、國さへ大きければ、従つて強い者だと思ひ込み、初めは支那を力にし、次には露西亞を頼にして、兎角日本の云ふ事を聞きませんでした。

所が今度日本は、露西亞と戦を開く事に成り、已に仁川や旅順に於いて、露西亞の海軍を十分に痛めて、大勝利を占めたばかりで無



進猛の佐中瀬廣

＊ 日 韓 の 條 約 ＊

く陸軍も、う仁川から上つて、やがて京城まで進んで來ると云ふ、
非常な勢を現はしましたから、こゝに初めて朝鮮も、日本の強い事
を知り、また十分頼に成る事を悟つて、忽ちこの條約を結んだので
あります。

この條約に付きましたは、日本の全權公使林權介が、朝鮮の外部
大臣李址鎔と會つて、この議定書を作つたのでありますが、それに
引かへて、露西亞の公使バフロフは、今まで朝鮮政府に立ち入つて
勝手に掻き廻はして居ながら、此時はもう尾を捲いて、本國へ逃て
行つてしまいました。

さて日韓の條約が、目度く取換はしに成りますと、日本の天
皇陛下は、侯爵伊藤博文を慰問大使として、朝鮮の天皇陛下に、親
しく御見舞をお遣はしに成りました。

するとまた朝鮮の皇帝も、大きにお喜びに成りまして、伊藤侯爵

★ 決 死 隊 の 巻 ★

の一行に、京城の御所で拜謁を賜はり、猶此後の事に付いて、親し
く御依頼があつたと云ふ事です。

此通り我が日本は、此處で朝鮮と手を握り合つて、是からは弟分
同様に、扶け立て、行く事に成りました。それと云ふのも我が海軍
が、已に最初の戦争に於いて、見事敵軍を撃ち破り、世界の人を驚
かす迄の、目覺ましい行動をしたからではありませんか。

まことに戦争と云ふものは、その初が大切であります。初の一戦
に勝を占めれば、味方は七分の強點が出て、敵は七分の弱味を覺え
ます。が、よし初に勝つた所で、後に敗けては又役に立ちません。
しかもわが海軍は、後に果して敗けましたらうか？

第二章 閉塞の計畫

さても東郷聯合艦隊司令長官は旅順攻撃の大任を帯びて、日夜暮

✿ 閉塞の計畫 ✿

僚の諸將校と軍議を凝らし、或る時は驅逐艦を以て、或る時は戦艦を以て、頻りに外から攻め立てましたが、敵は最初の海戦に、大切の戦艦をひどく傷けられましたから、それを繕ひに掛つたと見えて、其後は少しも出て来ません。
そこで新たに企てましたのは、この旅順口の港の口を、此方から閉塞してしまつて、中にある敵の軍艦を、少しも動けない様にしようといふ事です。
尤もこの旅順口を閉塞しようといふ事は、已に開戦の以前から、我が海軍の部内に行はれて居たので、中佐有馬良橋少佐廣瀬武夫、又此間怪我をした、大尉松村菊雄など云ふ人々は、常から熱心に考へて居りました。
それは何故だといひますと、一體日本は島國で、一旦露西亞と戦をする事に成れば、何うしても大勢の軍隊を、支那か朝鮮へ渡さな

★ 決死隊の巻 ★

ければ成りません。それには日本海や支那海を、早く此方で取つてしまつて、安全な物にするのが肝腎で、若し露西亞の軍艦が、度々途中へ出て来る様では、大變な邪魔に成りますから、何うしてもこの軍艦を、早く役に立たない様にしなければ成らないのです。
さればこそ東郷司令長官は、初から此處に目を着けて、旅順口の敵の艦隊を、全滅させやうと思ひましたが、何しろ先方が引込んで居ては、どうも戦が出来ません。
尤も出て来ないからと云つて、此方から攻め込んで行けば、勝てない事はありませんが、それには何うしても艦を傷つけ、また人を失ひまして、此方の損害も多く成りますから、そこでまづ此の謀を以て、敵を港に押し込めたまゝ、働けない様にしようといふのです。
所でその閉塞とは、全體どんな事をするのでせう？ それは他でもありません。まづ永年使ひ古して、もう惜く無い商船を、此方か

ら持つて行つて、その港口に押し沈め、水の底を浅くして、敵の艦の通れない様にするのです。

＊ 閉塞の計画 ＊

この閉塞と云ふ事は、海戦に度々行はれる事で、現に今から六七年前、亞米利加と西班牙とが、キューバで戦争をしました時、亞米利加の海軍大尉で、ホブソンと云ふ人が、たつた六人の部下と共に商船をサン、ヂャゴの港口に沈めて、見事この閉塞を仕遂げた事があります。

けれども其時は、只の一艘で出来ました。所が今度の旅順口は、いくら口が狭くても、小さな古商船で閉がうと云ふには、二艘や三艘では出来ません。

そこでまづ此の爲めに、天津、仁川、武州、武揚、報國と、この五艘を使ふ事に成りました。

それで船は出来ましたが、それを沈めに行くには、誰がこれに當

りましたか？

第三章 決死隊の出發

元より使ひ古した商船、大砲の備も無ければ、また彈丸除の用意もありません。それで軍艦も居れば、砲臺も在り、水雷艇も待ち構へて居れば、探海燈も睨め廻はして居ると云ふ、恐ろしい敵地へ乗り込まうとするのは、素肌で刃物の中へ入る様なもの、命を惜む弱

★ 決死隊の巻 ★

蟲には、迎も出来ない仕事です。而もその乗り込んだ船は、其場で自分から沈めてしまひ、それから端艇で歸つて来やうと云ふ、この危険い仕事をするには、どうしても度胸の据つた、勇氣の充ちた、そして仕事に慣れた者を、選んで出さなければ成りません。

そこでこの五艘の船には、將校と兵士とで、働く者が七十七人

✿ 發出の隊死決 ✿

りましたから、まづこの人数を、總艦隊から選ぶ事に成りますと、さアこれを聞傳へて、私もくと、この閉塞隊に加はる事を願ひ出た人の數が、二千人餘りに上つたさうです。中にはまた、この大勢の志願者の中から、選出されると云ふ事は、とても只事では出来ませんので、自分で自分の指を切つて、その血で願書を書いた者さへありました。かう云ふ勢ですから、東郷司令長官も、大きに満足に思ひました。が、さてこれを選ぶのには、また一方ならぬ苦心をして、漸く定つた七十七人。誰云ふとなくこの組に、決死隊と云ふ勇ましい名をつけました。尤もその指揮官には、兼て閉塞の事を思ひ立つて、その調査をよくして居た、將校達を任じたのであります。即ち有馬中佐が總指揮官に成つて、自ら天津丸を指揮し、その機關長としては、山賀大機

★ 卷の隊死決 ★

關士が選ばれました。報國丸の指揮官は廣瀬少佐で、機關長は栗田大機關士です。仁川丸の指揮官は、大尉齋藤七五郎で、機關長は南澤大機關士です。武州丸はまた中尉鳥崎保三が指揮し、杉少機關士が機關長に成りました。が、さて武揚丸の指揮官には、大尉正木義太が成て、大石中機關士が機關長と、それ／＼受持が極まりました。いよ／＼二月十九日の夜半に、それ／＼軍艦を出て、その商船に乗り移る事に成りました。すると、此の人々の乗つて居た艦では、何れも送別の式を擧げて、勇士の門出を祝ひましたが、中にも淺間艦では、艦長大佐八代六郎が、兼て東宮殿下から拜領した、大きな銀の盞を出して来て、これで決死隊の人々と、水盃をして別を告げ、大きに一同を勵ましたさうです。

さて決死隊の人々は、此處で別を告げまして、壮んな萬歳の聲と勇ましい軍樂の響くに送られて、いよいよ根據地を離れますと、この掩護隊として、真野中佐は叢雲、夕霧、不知火、陽炎の、四驅逐艦を率ゐ、また櫻井少佐は、隼、鵠、真鶴、千鳥、燕などの水雷艇を指揮して、閉塞隊員收容の爲めに、一所に連れ立つて出て行きま

した。
この驅逐艦は、閉塞隊の船を沈めに行くのを、若し敵艦が邪魔をするなら、直ちにこれを追拂ふ爲め。また水雷艇は、此の人々の仕事を仕逐げて、此方へ引揚げやうとする時に、助けて連れて歸ると云ふ、それらの役目を帯びて、一所に跟いて行つたのであります。

第四章 決死隊の行動

滿身皆膽とも云ふべき、この決死隊の面々が、目ざす旅順の港口

に近づきましたのは、實に二月二十四日の、午前三時半頃でありました。

此時眞先に進みましたのは、有馬總指揮官の乗つて居る、天津丸でありましたが、港の口に近づきますと、敵は山の上に設けてある、探海燈の光でもつて、はやくもこれを見付けましたから、忽ち大砲の火蓋を切つて、盛んに彈丸を浴せかけました。

その中を事ともせず、船は猶も進んで行きましたが、忽ちその艦橋へ、一發彈丸を受けたと思ふと、見る／＼中に火事が起つて、同事に天津丸は動けなくなりました。けれども中佐には怪我も無く、其儘其處へ船を沈めて、急いで引揚げてしまつたのであります。

次に進んだ報國丸は、廣瀬少佐の指揮の下に、港の口まで入りましたが、丁度此前の海戦の時、彈丸に撃たれて逃げ損ひ、此の傍の暗礁の上に、居据りに成つて居たレトキザンから、劇しく砲撃を受け

★ 動行の隊死決 ★

ましたので、とうとう其處の燈臺の下に、沈没してしまひました。其他の武揚丸、武州丸、仁川丸の三艘も、或は岩の上に乗らあげ、或は自分で破裂して、それごとく沈んでしまひましたから、乗組の隊員は兼て用意の端艇に乗り移つて、皆引揚げて來ましたが、其時二等機關兵が一人、彈丸に中つて戦死をし、三人軽い怪我した許りで、後は皆無事でありましたのは、誠に不思議な事であります。然るにこの閉塞は、残念ながら出來損ひました。それは是等の人々が、敵の彈丸を恐れたからでは無く、全く探海燈に邪魔をされたからです。一體探海燈と云ふものは、蠟燭を何萬本となく、一所に集めた程の光で、海の上を照らす物ですから、若しこの光を正面から受けると、まるで夏の日中に、太陽を真向に見る様なもので、如何に眼のよい人であつても、まるで方角が解らなく成つてしまひます。

★ 卷の隊死決 ★

それに引かへて敵からは、この燈明の光でもつて、此方の船の動く所が、手に取る様に見えるのですから、彈丸の照準も十分解つて、こんな都合の好い事は無いのです。この通り、先方は如何にでも邪魔が出來て、此方は自由に働けないと云ふ、非常なむづかしい場合ですから、元より神では無い人達の、仕損じるのも無理はありません。然しながら、こんなむづかしい仕事、こんなあぶない事業をも、恐ろしいとは決して思はず、兎も角も乗つて來た船は、皆其場に沈めて歸へると云ふ、この大膽な働きには、旅順口の敵艦隊も、確かに膽を冷しましたらう。さてまた味方に取りましては、この勇猛な決死隊に依つて、只さへ恐い事を知らぬ日本軍は、一層勇氣を奮ひ起して、國の爲め君の爲めには、決して命を惜まないと云ふ、日本魂の本性は、いよく

磨き上られたのであります。

第五章 駆逐艦の激戦

益々勇氣の充ちて来る我が海軍は、旅順口の敵ばかりでは、物足りなく思ひましたか、一部の艦隊は遙かに進んで、ウラジヤストクを攻めに行きました。

時は三月の六日！日本でこそ春でありますが、此邊はまだ寒中で、雪も降れば、氷も張つて居て、戦をするには大層不便です。

それにも關はず我が海軍は、砲門を開いて戦を仕掛けましたが、敵は黙つて引込んだぎり、少しも手を出しませんから、餘義無く引揚げてしまひました。

其癖このウラジヤストクには、ロシヤ、グロムボイ、リユーリツクなど云ふ、立派な軍艦があるのですが、出て来て戦をする勇氣が

＊ 戦激の艦逐驅 ＊

無いとは、何と云ふ弱い事せう。

それで、折角攻めに行つたウラジヤストクの艦隊は、どうも敵手に成りませんから、今度は例の駆逐艦隊を以て、又候旅順口を攻撃しました。

初めこの旅順口には、海軍大將アレキシーフが、總督に成つて居た外に、スタルクと云ふ中將が、艦隊司令長官を勤めて居ましたが、二月八日の海戦に、見事に打破られた爲に、忽ち免職され、その代りにマカロフと云ふ、名高い將軍が司令長官に成つて、此處の艦隊を指揮する事に成つて居ました。

此のマカロフと云ふ人は、同じ海軍の中將でありますが、スタルクとは違ひまして、戦術にも委しく、勇氣にも富んで居るので、日本の軍人からも、兼て崇められて居た人です。

ですから旅順口の艦隊も、此人が來ましてからは、大分元氣付き

★ 巻の隊死決 ★

まして、日本軍の攻撃に對しても、随分強い戦鬪をしました。
 さればこの驅逐艦隊が、専ら敵の砲臺に向つて、攻撃を加へに出
 かけましたのに、敵からも驅逐艦隊が出て来て、味方を追拂はうと
 しましたから、此處で非常な激戦が起りました。
 中にも朝夕、霞、曉、など云ふ驅逐艦は、一番激しく戦ひまして、
 或る時は敵の艦と、殆んど摩れ合ふまで入り亂れ、切りに砲撃を加
 へましたので、流石の敵の驅逐艦も、汽罐を破られ、火事を出して
 果は乗組の士官も水兵も、悲しい聲で泣き騒ぎながら、港の中へ逃
 げ込んでしまつたのです。
 また連艦の如きは、ステルグーシチー艦を撃ち破り、此を分捕に
 して歸らうとした位、目覺ましい働きをしたのですが、其代りわが
 軍にも、南澤大機關士、島少尉など負傷をし、其他下士卒の間にも
 戦死した者が七八人、負傷者が十二三人ありました。

然し驅逐艦と驅逐艦とが、かく迄劇しく戦ひましたのは、今まで
 の世界の海戦の中にも、まだ見る事の出来なかつた事で、如何にも
 珍らしい激戦なのであります。
 また敵の艦隊が、かくまで手酷く攻撃されながら、容易には降参
 せず、力の限り抵抗しましたのは、なか／＼感心すべき所で、是も
 全くマカロフと云ふ、良い司令官が出来た故でせう。
 尤も此の戦争の最中、方々の敵の砲臺からは、頻りに大砲を撃ち
 おろしまして、我が艦隊を惱まさうとしました。が、勇猛無双の日本
 軍人は、それ等の攻撃を事ともせず、自在に艦を乗りまはし、巧み
 に砲を放ちまして、遂にかほどの勳功を現はしました。
 その勇猛な人々の名を、今此所に挙げますれば、第一驅逐艦隊司
 令大佐淺井正次郎、第三驅逐艦隊司令中佐土屋光金、霞艦長少佐大
 島正毅、朝夕艦長少佐松永光敬、連艦長少佐近藤恒松、曙艦長少佐

九津見鶴雄、曙艦長大尉末次直次郎などでありました。

第六章 間接射撃

驅逐艦の激戦に續いて、目覺ましいわが海軍の行動は、三月廿二日に行つた、間接射撃でありませう。

間接射撃とは、的を目で見ないで、間に物を置きながら、只見當丈つけて撃つと云ふ、實にむづかしい仕事なのです。

されば我が海軍は、一時もはやく敵の艦隊を撃ち破り、一艘も役に立たない様にしてやらうと、頻りに戦を挑みました。敵は港に引込んだ限り、なか／＼外へ出て來ませんから、其所で今度は、敵艦を港に置いた儘で、外から砲彈を食はせやうと云ふので、さてこそ間接射撃を試みたのであります。

で、我が戦艦の中から、富士と八島がその役に當りましたが、

★ 巻の陸死 ★

それも滅多な所から撃つと、敵の砲臺から砲彈を浴びせられて、却つて此方が危険ですから、まづ場所を選びますと、老鐵山の下、鳩灣と云ふ所の近邊に、砲臺の砲彈の届かない、都合の好い所がありましたから、二艦は此所に陣取つて、大砲の口を少し上へ向け、間にある山を越へて、港の中へ砲彈を撃ち込みました。

けれども元より其的は、少しも目には見えないのですから、折角放した此方の砲彈が、何所へ中つたか解りません。

それにはまた此方の沖に、見張りの艦が置いてあり。是がちゃんど望遠鏡でもつて、港の中を見て居ては、今の砲彈は右へ落ちたとか、今の砲彈は遠過ぎたとか、あれは左へ外れたとか、それはちと届かないとか、一々信號で教へますので、そのまた信號に依つて、照準を定めて撃ちます中に、果は目の前の物を撃つ様に、少しも外れなく成りましたから、その爲めに旅順の港は、船渠を破られた

＊ 撃 射 接 問 ＊

り、探海燈を壊されたり、折角逃げ込んで居る軍艦にも、バラ／＼弾が降りかゝると云ふ仕末で、散々な目に遭つたのであります。かう云ふ射撃の法と云ふものは、全く大砲の構造の好いのと、その扱ひ方の上手などで、非常な效力を現はすものですから、全く學問と智恵の力で、戦争をすると云つてもよいのです。實に學問の力と云へば、それよりも今度の戦争で、非常な效力を現はしたのは、無線電信であります。無線電信とは、普通の電信の様に、針紵に電氣を通して、互ひに通信をするのでは無く、只電氣の力をば、空氣の中に通はせて、用を辨じる仕掛なのです。

この電信は、伊太利のマルコニイと云ふ人が、初めて發明したのであります。日本でも、海軍中佐外波内藏吉、技師木村駿吉などと云ふ、學問に委しい人が、永い間苦心をして、遂に日本でも出來

★ 卷 の 隊 死 決 ★

る様に成り、そしてこの器械をば、どの軍艦にも備へつけましたから、軍艦同士の信號は、たとひ遠く離れて居ても、直ぐ通じる様に成つたのです。

この間接射撃の時に、見張りの艦から富士や八島へ、砲彈の中所を教へたのも、矢張り無線電信の力であつたと云ひます。

尤も敵の軍艦は、この間接射撃に遭ひまして、とても港内に居られなく成つたものですから、とう／＼外へ出て來ましたが、卑怯にも砲臺を後楯に取つて、味方を其所まで釣りよせ、うつかり側へ寄つたらば、砲臺と一所に撃ち出さうと云ふ、計略がすつかり見え透きましたから、此方は決して其手に乗らず、此日は一まづ引揚げてしまひました。

それも我軍の智恵のある所で、砲臺を敵手に戦をするのは、艦隊に取つて徳の無い事を、よく知つて居た故であります。

第七章 第二回の閉塞

✿ 第二回の閉塞 ✿

旅順の攻撃が初まつてから、已に一月半ばかりに成りました。其間我海軍は、戦ふ度に勝利を占めて居りますが、敵も亦去る者で、名將マカロフの來てからは、頻りに軍艦の修覆を急ぎ、また部下の士卒を勵まして、機會もあらば打つて出で、花々しく戦はうと云ふ意氣組が、自然と味方にも知れました。

面白しマカロフ中將！ 世界で名高い海戦の名人を、敵手に取つて戦ふのは、元より自分も望む所と、東郷司令長官も、大きに張合が出て來ましたが、それにしても敵の艦隊が、沖合へ戦ひに出て來る様では、例の陸兵を運ぶのに、甚だ邪魔に成りますから、どうしても今一度、此港の口を閉いで、暫時自由の利かない様にしなければなりません。

★ 決死隊の巻 ★

また閉塞隊の將校達も、此間の仕損じを、實に口惜しく思つて居た所ですから、何うかしてもう一度やつて、是非成功させなければ成らないと、茲に軍議がまとまりまして、三月の二十七日には、二度目の閉塞隊が向ひました。

そこで之に用ひる船も、千代、福井、米山、彌彦と、新たに四艘選ばれましたが、閉塞隊の指揮官には、首に前の時の將校が任せられ、只下士以下の者のみが、皆新たに選ばれました。

さうで無くてさへ、前回の決死隊の行動に依つて、士氣の奮ひ立つて居た時ですから、今度も志願者は非常に多く、我もくと先を争ひました。

それにまた前の時の隊員は、今度は屹度仕遂げるから、是非もう一度遣つてくれと云ひ出し、此等を説き宥めるには、大層骨が折れましたが、漸くの事で下士以下は、皆新手を出す事に極めて、何千

人と云ふ中から、六十五人を選び出したのであります。七二

で、有馬中佐と山賀大機關士は、千代丸に乗つて一番に進み。廣瀬少佐と栗田大機關士は、福井丸で第二番。三番は彌彦丸で、中尉森初次と、大機關士小川英雄が乗組み。第四番の米山丸には、正木大尉が指揮官に成つて、之に中尉島田初藏が付き添ひ、勇み立つて出かけました。

尤も今度の閉塞こそ、仕損じては成らぬと云ふので、何れも十分に念を入れました。中にも船の中に仕掛けた爆発薬には、電氣の線を繋いでおいて、いざと云ふ時に、直ぐ破裂する様にしてあるので、前には敵の砲弾を受けて、その電線を切られてからは、まるで爆発の出来なかつたのを、今度はまた工夫を凝らして、たとひ線は切れてしまつても、亦他の仕掛で破裂する様に、ちやんと拵へておきました。

是は廣瀬少佐の考案なので、少佐はこの事を誰にも解る様に、圖を書いて船毎に配りました。が、それでもまだ安心せず、更に隊員を集めて、丁寧に説明して聞かせた上、自分が一番信じて居る、杉野上等兵曹を、わざ／＼各船に出張させて、實物に付いて詳しく説明させました。

これで用意も十分出来ましたから、また水雷艇隊に掩護されて、二十六日に出發すると、二十七日の夜半には、もう旅順口の入口に達しました。其時月はありながら、雲に掩はれて空闇く、閉塞には持つて来いと云ふ空合です。

第八章 閉塞の成功

されば今度の閉塞隊は、容易に探海燈にも見付けられず、段々港近く進みましたが、やがてもう二哩で、目的す所へ行けると云ふ時

＊ 功 成 の 塞 閉 ＊

敵は初めて見付けまして、例の探海燈を照らしつけるやら、大砲を撃ちかけるやら、切りに邪魔を初めました。けれども此艦は決死の勇士、大切の任務を果してからで無ければ、一步も後へは退かぬと云ふ勢で、砲彈を潜り、波濤を破つて、まっしぐらに進みましたが、第一番の米山丸は、黄金山の西側へ来て、先自分から錨を投げ込み、用意の火薬を爆發させて、首尾好く其所へ沈んでしまひました。

次に進んで行つた福井丸は、千代丸の左側を通り過ぎて、其前へ行つて錨を入れやうとすると、其途端に敵の驅逐艦から、魚形水雷を一發放しましたが、それが生憎く命中して、其儘沈んでしまつた許りか、丁度爆發藥を火に掛けやうとして居た、杉野上等兵曹は、その爲めに見事戦死してしまひました。

が、それとは少しも知りませんから、指揮官廣瀬少佐は、急いで

★ 卷 の 隊 死 決 ★

端艇を卸させて、乗組をこれへ乗り移らせ、自分も一所に引揚げやうとして、猶人々を檢めますのに、杉野の顔が見えません。

そこでまた船へ歸つて、方々探して見ましたが、どうも見當りませんから、また端艇を調べて見。それでも未だ来て居ませんから、もう一度船の中を探してまはり、かう云ふ事を三度もして、三度目にはもう本船が、皆水の中へ入つてしまつて、探しやうがありません。んから、餘儀なく少佐は端艇へ飛び乗つて、其所を退かうとする途端、何所から来たか敵彈一發、この端艇へ落ちたと思ふと、南無三寶廣瀬少佐は、もう影も形も留めず、只側に居た水兵の衣服に、丁度一錢銅貨程の肉が、粘り着いて残つて居ました。

少佐が戦死を遂げてからは、栗田大機關士が、代つて指揮をして居りましたが、何分雨の様に來る彈丸は、人を傷け船を破つて、その凄まじさ！ 目も明けない位です。

✿ 閉塞の成功 ✿

その中に端艇は、敵弾に破られた底の穴から、水が段々入つて来て、今にも沈みさうに成つて來ましたが、生憎これを掻き出す物がありません。其所で栗田大機關士は、手創を受けながら少しも屈せず、自分の長靴を脱いで、これで水を酌み出しては、辛くも其場を引揚げて、水雷艇に收容されました。

次に三番の彌彦丸は、福井丸のまた左へ出て、手筈の通り自ら爆発し、その沈没するのを見ながら、乗組は皆引揚げました。

さてまた四番の米山丸は、少し後れて港口へ來ましたが、其間に指揮官正木大尉は、右の肩に砲彈を受けながら、物ともせずに進んで行くと、やがて中から驅逐艦が一隻、港外へ向つて出て來ましたから、此奴出して成るものかと、尙勢好く船を進ませて、いきなりその驅逐艦に打つかり、敵の狼狽て撃ち出す砲彈を、平氣で潜り抜けて港口に達し、巧く水路の中央を見て、此所で錨を卸しました。

★ 決死隊の巻 ★

所が敵の魚形水雷が、生憎船に中りましたので、その勢で少し左へ寄せられ、其所で沈んでしまつたのです。

此時指揮官附の島田中尉も、非常な創を受けて殆んど氣絶し、また鹽谷兵曹は、四ヶ所に砲彈を受けましたが、この人は島田中尉に代つて、尙機關兵を指揮して居りました。

さてこの二度目の閉塞で、四艘の船を沈めまして、初度の時から見ますと、皆よく目的を遂げました。現に巡洋艦は其所を通る事が出來ず、まして戦闘艦の様な、底の深い軍艦は、とても出て來られなく成つたのでした。

それと云ふのも、閉塞隊の諸勇士が、命を惜まず死を決して、一心に任務を盡した故であります。さればこそ廣瀬少佐の如きは、其功勞で中佐に進められ、また金鷄勳章の功三級に叙せられました。

一體功三級と云へば、今迄に將官で無ければ、受けた事のない勳

章でした。それをこの廣瀬が、中佐として受けましたのは、まことに特別の事でありませぬ。が、中佐は只に閉塞隊の爲めに、非常に功勞のあつた許りで無く、常から我が海軍の爲めには、熱心に研究をして居た人で、已に同じ海軍部内でも、軍神と呼ばれた位ですから、此人にして此の名譽を得たのも、決して無理はありません。殊にその最期が、三度までも部下を探がしに行つて、其爲めに自分も斃れたのですから、その情誼の厚い事、誰も感せずには居られませんでした。

第九章 マカロフの戦死

軍神廣瀬中佐の葬式は、四月十三日の午後、東京に於て行はれました。折から櫻の眞盛り。花は櫻木、人は武士とは、昔から人の云ふ所であります。然るにその花の中の花なる、櫻の花の眞盛りの間

を、武士の中の武士と云はれた、廣瀬中佐の櫃の送られたのは、實に不思議の因縁ではありませんか。

而もそれより不思議なのは、丁度この葬式の日、旅順口に海戦が開かれ、その海戦の名残として、敵の司令長官マカロフが、我が沈設水雷に中つて、戦死を遂げた事でもあります。

是より先マカロフは、日本の閉塞隊に依つて、港口に沈められた船をば、頻りに碎いて居りましたが、その中に往來の出来る様に成りましたから、機會があれば沖へ乗り出して、日本の艦隊を敵手に花々しく戦はうとしました。

それをまた此方では、早くも悟りましたから、今度は私かに港の外へ、機械水雷を仕掛けておきました。

それには水雷術に長けて居る、海軍中佐小田喜代藏が、造兵大監種田右八郎と一所に、蛟龍丸と云ふ船に乗つて、夜の中に港口に近

つき、敵の艦隊が出入する時は、必ず此邊を通るに相違無いと、兼て調べて置いた所へ、手ばやく水雷を沈めて置いたのです。明れば十三日の午前八時、我第三戦隊は、第二驅逐隊を助けながら、敵の様子を覗ひに、旅順の港外まで進みました。するとやがて九時頃に成つて、敵は巡洋艦バアヤンを真先にして、ノーキック、アスコルド、ヂアナ、ペトロバウロウスク、ボペーダ、ボルターワなど、勢よく港を乗り出して、此方に向つて来ましたから、第三戦隊は之を迎へて、戦ひながら段々に、沖の方へと誘ひ出し、此所に待つて居た第一戦隊に、無線電信で知らせました。今まで遙かの沖間に、霧に包まれて居た第一戦隊は、それと聞くと勇み立つて、港外近く進んで来ました。するとまた敵の艦隊は、この勢に少し驚き、今此所で戦ふより、港近くおびき寄せて、砲臺と一所に撃つた方が、都合が好いと思つ

たものですから、急に艦を返へしまして、黄金山の下へと廻はりました。黄金山の下！ 其所には味方の水雷が設けてあります。それを夢にも知りませんから、旗艦ペトロバウロウスクは、司令長官旗を高く翻へしながら、真先に進んで行きます。それを此方の艦から見ると、正しく水雷のある方へ向ひますから、『ソレ今に乗り揚げるぞ。』ソレ今破裂するぞ。『今ぞ〜！』と云ふ中に、忽ち恐ろしい響がして、真白な水煙が、まるで雲の峰の様に高く湧き上つたと思ふと、一萬九百噸の大戦闘艦は、あはれ其中に包まれて、見る／＼中に二つに破れて、海に沈んでしまひました。我知らず雀踊して、萬歳々と叫びました。これを見た後の艦隊は、驚くまい事か、狼狽まい事か！ 忽ちそ

の陣列を亂だして、何も無い海の中を、矢鱈にボン／＼撃ちながら、我先きにと港内へ逃げ込み、初めの勢は何所へやら、小さく成つて隠れてしまひました。

それも其筈でありませう。この旗艦ペトロバウロウスクには、司令長官と頼み切つた、マカロフ中將を初めとし、露西亞皇帝の甥と崇められる、キリル大公も乗つて居たので。中將は遂に戦死し、大公は大怪我をして、これも海の中へ投げ落されたのを、命から／＼助け揚げられたと云ふ、非常な損害を受けたのですから、敵はまるで元氣が挫けて、たとひ閉塞船は無くなつても、容易に出て来る事はできません。

そこで我が艦隊からは、また間接射撃を行つて、港内の敵を窘めました。此時の此役は、此間新たに出来て、初めて戦闘に加はつた、彼の春日と日進とが、これを引請ける事に成りました。

で、この新造の二艦は、例の老鐵山の下へ来て、大砲の撃初を行いました。すると敵の砲臺や、また港内の軍艦からも、負けない氣に成つて撃ち出しましたが、此方には何の損害も無く、其中に敵の砲臺は、此方の砲弾で破られたと見えて、黙つて音もしない様に成りました。

まことに此戦には、敵は大切な司令長官を失ひ、貴重な戦闘艦を失ひ、その上何百人とも知れない、大勢の士卒を失ひましたが、味方は何の艦にも怪我は無く、水兵一人損じませんでした。

然し敵將のマカロフを、此一戦で殺してしまつたのは、まことに残念な事でありませう。此人は世界の海軍の中に、三大家と呼ばれた者の一人で、現にわが東郷司令長官すら、此人の著はした書物に依つて、學んだ事も少くないさうです。されば此の戦死を聞いて、之を悲み、之を惜んだものは、決して露西亞人ばかりではありません

でした。
が、先に廣瀬中佐を失つた、我が日本の海軍は、之に依て良い教訓を受け、また非常な勇氣を得ました。マカロフ中將を失つた、彼露西亞の海軍は、果して何程の教訓を受け、また何程の勇氣を得ましたらう？

第十章 行軍の困難

茲にまた我が陸軍は、已に其先鋒の一隊が、二月八日に仁川で上陸してから、近衛、第二、第十二と、この三師團で出来て居る、第一軍が出て行つて、同じ朝鮮から進みましたが、斯く海軍の方では、度々目覺ましい戦をして、其都度勝利を得て居るのに、陸戦の容易に初まらないのは、何う云ふものであつたかと云ひますと、是には元より理由があつたのです。

✿ 難 困 の 軍 行 ✿

一體朝鮮と云ふ所は、まだ十分開けて居ない國で、殊に道の悪い事は、日本の田舎より甚しい位です。また川がありまして、橋の架つて居るのは稀で、多くは舟で渡るか、歩いて越えなければなりません。

その上に雨が降つたり、また雪が解けたりしますと、その道が非常に溼つて、人の膝までも泥に浸かり、その川が水を増して、馬の背も立たない位に成ります。其所を何萬人と云ふ大軍が、進んで行かうと云ふのですから、その困難な事と云ふものは、實際戦へ出た事の無い者には、逆も想像は出来ずまい。

それにまた、陸軍が戦をしようとして、まづ斥候を前へ出して、敵の様子をよく探り、それから隊を進めるので。そのまた隊を進めるのに、三つの師團が頭を揃へて、等しく進んで行かなくては、十分の力が出せないのです。然るに朝鮮の道と云ふものが、前にも

★ 卷 の 隊 死 決 ★

＊ 難 困 の 軍 行 ＊

云ふ通りの仕末ですから、どうしても三個の師團が、揃つて進む事が出来ませんから、大いに苦心をしたのであります。それも只人間斗が、歩いて行くのならよいのですが、馬もあれば車もあり、大砲もあれば、弾薬もあり、それに人や馬の糧食まで、少しも間の切れない様に、持つて行かなければ成らないのですから、一日に漸く二里程より進めず、その困難は非常でありました。けれども我が陸軍は、よくこの困難に打ち勝ちまして、京城から平壤まで進んで、此邊を皆占領してしまひました。平壤と云へば、彼の日清戦争の時に、大激戦のあつた所です。またこの朝鮮國では、京城に次いでのと都と稱へて、なかく大切な所ですから、此所を此方で占めると云ふ事は、大層利益のある事なのです。

さてこの平壤までは、首尾よく進んで來ましたが、これから先に

★ 卷 の 隊 死 決 ★

は露西亞兵が、大分入り込んで居る様ですから、それを追拂つてからで無ければ、思ふ様に進めません。

そこで例の斥候を放つて、敵の様子を覗ふ中に、果して我が斥候騎兵は、初は七星門と云ふ所、次には平壤から二十里程隔つた、平安道の博川と云ふ所で、敵の騎兵と衝突しました。それは三月九日の事でした。

此時我が斥候は、只四名でありまして、敵は三十騎も居りましたから、遂に田所一等卒は、敵の手に斃れました。但しこの田所こそ、わが陸軍軍人の中で、一番先に戦死を遂げた、名譽の勇士なのであります。

然しかう云ふ小衝突は、途中で幾度もありましたが、其中に段々進んで行つて、遂に三月の廿八日、我軍は定州を占領しました。

第十一章 騎兵の奮戦

騎兵の奮戦

定州と云ふ所は、平壤から三十里許り隔たつた、義州街道にある城で、此所に露西亞兵が立て籠つて居たのです。其所へ我が斥候騎兵は、偵察の爲めに進みよりましたが、その南門の外で、敵方の斥候と出會しましたから、忽ち入り亂れて闘ひました。すると城内の敵兵は、これを見て銃口を揃へ、我が斥候を目がけて撃ち出しましたので、此方は一トまづ北の方へ避け、其所に居た騎兵の本隊と、一所に成つて又攻め立てました。その戦鬪の初まつたのは、午前十一時頃でありましたが、午後一時少し過ぎた頃、後の方に扣へて居た、我軍の歩兵隊が、此所へ進んで來ましたので、敵は防ぎ兼ねましたか、この城を棄て、逃げ出

決死隊の巻

しました。

それをまたわが騎兵は、どん／＼追つ駆けて撃ち惱まし、やがてこの定州城を、見事に占領したのであります。此時敵の兵は、此方の兵に較べまして、確かに多かつたに相違ありませんが、それでも防ぎ支へる事が出來ず、意氣地無く城を明け渡すとは、何と云ふ見苦しい事でありませう。然しこの戦争で、我が中尉加納忠男、特務曹長清末廣吉、其他三人は戦死を遂げ、大尉黒川敬藏、中尉幸村銀六、少尉長岡護全、其他十人ほどは怪我をしました。で、この戦争は、主に近衛の騎兵が働いたので、別に大きな戦争ではありませんが、それでも陸軍では初度の戦争です。その初度の戦争に、見事敵を撃ち退けた、わが陸軍の本事には、敵が定めし舌を捲きましたらう。

一體我が日本は、海軍でこそ勝利を得たれ、陸軍は果して何うだらうか！ また露西亞と云ふ國は、海軍はさまで進んでは居ぬが、陸軍は非常に強い國と、自分でも許せば、世界でも認めて居たのであります。

然るにその陸戦が、此所で第一の衝突をして見ますと、敵は大勢味方は小勢なのに拘らず、忽ち日本の勝利に成りましたから、これには露西亞ばかりで無く、世界各国でも驚いたに相違ありません。して見ると露西亞の兵は、評判よりも弱いのでせうか。否、露西亞兵は決して弱くはありません。只我日本兵が、またそれよりも強かつたのです。

第十二章 露艦の亂暴

されば彼の露西亞軍は、海戦でも陸戦でも、日本には敵はぬと云

ふ事が、段々明かに成つて來ました。

所が彼の露西亞軍にも、我が日本には出来ないといふ、一種の長所があるのです。それは他でもありません、武器も無ければ、武装も仕て無い、商船に向つて大砲を撃ちかけ、赤兒の手を捻ぢる様な事をして、獨りで強がつて居る事です。

實に露西亞の艦隊は、戦争が初まると間もなく、北海道の近邊まで來て、奈古浦丸と云ふ商船を、無慘にも撃ち沈めました。其後三月の末に成つて、また繁榮丸と云ふ通信船を、渤海灣の入口で、同じく撃ち沈めてしまひました。

するとまた其次には、四月廿五日の事、朝鮮の元山沖で、五洋丸と云ふ商船と、御用船金州丸をば、亂暴にも撃ち沈したのであります。中にも金州丸には、陸兵が一大隊餘り乗つて居て、大切な任務を帯びて居りましたのに、不意に來て砲撃し、其上乗組の陸兵を、皆

捕虜にしやうとしました。

元より陸兵の事でありますから、海の上では如何する事も出来ません。けれどもおめく捕虜に成るのは、如何にも残念で堪りませんから、敵はぬながらも一斉射撃をして、後は自分で腹を切つたり、海へ飛込だりして仕舞ひました。

それでも監督將校の、海軍少佐溝口武五郎を初め、其他幾人かの將校は、敵の艦へ談判に出かけたまゝ、とうく捕虜に成つてしまつたのです。

尤も此時には、上村司令長官が、第二艦隊を率ひまして、わざわざウラジラストックまで、攻撃に向つたのでありますが、生憎霧が非常に深く、途中で敵の艦隊と、行き違つてしまつたのを、少しも氣が付かず、その爲めにかう云ふ亂暴をされて、何うする事も出来なかつたのは、實に残念の至りでした。

✿ 暴 亂 の 經 緯 ✿

★ 卷 の 陸 死 決 ★

此通り露西亞軍は、我が軍の防備の無い所では、さも強さうに暴れますから、卑怯千萬な奴輩め、今に此の仇を討つて、一ト泡吹かせてくれねば成らぬと、我軍はいよく奮ひ立つて、段々に歩を進め、やがて鴨綠江の手前にある、義州城をも占領し、此所どうとう朝鮮全體は、皆我軍の有にしてしまひました。

さて此義州の先は、もう名高い鴨綠江で、鴨綠江の彼方は滿洲、其所には露西亞の陸兵が、我物顔に構へて居るのです。

而も其岸は高く、前に大な川があつて、流が急でありますから、敵に取つては此位よい陣地は無いのです。

が、たとひ大山があり、大川があつて、陣地は如何に堅固であらうとも、我が猛勇な日本軍の前には、何の支へる事が出来ませう？ 武装も無ければ、防備も無い、素手の者に向つてのみ、無暗に強がる露西亞とは、元より比較物には成らぬ我兵。天然の要害に堅め

て居る、この鴨綠江の敵に向つて、一大打撃を加へやうと云ふ勇氣は、これを天兵と云ひ、神軍と稱しても、決して無理はありませんま

第三編 九連城の巻

第一章 鴨綠江の地理

抑も鴨綠江と云ふ川は、朝鮮にある川の中でも、一番大きなものでありまして、その一番廣い所は、二里近くもある位です。

けれどもこの川には、常に水が一杯あるのでは無く、一年中に二月ばかり、雨の降りつゞける時こそ、一面の水が流れますけれども、其の他の時は水量が減つて、川口から六里ばかりの、安東縣と云ふ所まで、小さな蒸汽船が通ふばかり。それから上は川の水が、淺く幾筋にも別れて居て、而も流が急でありますから、ジャンクと云ふ小さな船の外は、容易に渡る事は出来ません。また流の分れて居る間には、洲が幾所も出来、その洲の大きな物

には、人家もあれば草木も生へて居りますが、中にも於赤島、黔定島、九里島、中江臺などは、義州城の近所にありまして、丁度今度の戦場に成つた所でありませぬ。

それから於赤島の對岸に、虎山と云ふ山がありまして、水は其麓からまた分れ、其所から鬩河と云ふ川に成つて居ります。

で、九連城や安東縣は、皆この鴨緑江の、右の岸(山上)にある城で、此所はもう支那の領分でありませぬが、今は其所へ露西亞の兵が来て立て籠つて居るのですから、これを攻め落さうと云ふには、何うしても此川を渡らなければ成りませぬ。

所が前にも云ふ通り、この川は水が淺く、流がまた急ですから、とても大きな船では渡れません。さうかと云つて此邊は、例の開けない國の癖で、橋が少しも架つて居りませぬから、此所で戦をしやうと云ふには、川を徒歩で押し渡るか、徒歩で渡る事の出來ない所

には、急に橋を架けなければ成らないのです。

然るにこの敵前架橋、即ち敵の目の前で橋を架けると云ふ事は、陸軍でも一番困難な仕事で、何しろ敵はこの川を渡らせまいとして出來る丈の妨害を試みますから、此位危険い事はありますまい。

また我が日本軍は、此時何所まで進んで居たかと云ひますと、鴨緑江の左の岸、朝鮮國の北の端にある、義州の城を占領し、こゝを中心として陣を敷て居りました。

この義州から九連城までは、直徑十八九町、道路を行くと四十町ばかりですが、その間に鴨緑江が、都合三つに分れて居て、その中洲には、敵の兵が出張つて居るのです。ですからまづ順序として、この中洲に居る敵兵を、撃ち掃つてしまはなければ成りませぬ。

それには幸ひ義州城が、高い岡に成つて居りますから、鴨緑江を一目に見下ろして、戦争には大層都合が好う御座いました。尤も敵

の構へて居る、右岸の土地も亦高臺ですから、つまり日露の大軍がこの大川を間に置いて、睨み合つて居たと云ふ有様。丁度川中島の合戦に、甲斐と越後の軍勢が、犀川を隔て、對陣したのと、まことに好く似て居りますが、其實我軍に、謙信以上の勇將はあつても、敵には信玄程の名將が、唯の一人も居ないのでですから、まことに氣の毒なものでした。

第二章 海軍の應援

さても我が第一軍は、大將黒木爲禎を司令官に頂き、中軍には、長谷川中將(好道)の近衛師團、右翼には、井上中將(光)の第十二師團、左翼には、西中將(寛次郎)の第二師團と、三面から進みまして、九連城の總攻撃をする事に成りましたが、それより先我軍は、屢々前衛の兵を放つて、鴨綠江の中洲をば、まづ占領する事に掛りました。

それと同時に海軍からは、第三艦隊司令官、細谷少將の指揮の下に、摩耶、宇治、隅田、其他の砲艦が、鴨綠江の川口の、龍巖浦と云ふ所から、上れる丈川を上つて、敵の陣へ大砲を撃ち掛け。また軍艦の乗り込めない所へは、裝砲艇隊と云つて、端艇に大砲を載せた物を、幾艘も進ませて、是れから陸上の敵を攻めましたから、敵も之に向つて戦ひましたが、遂に敵はなく成りまして、段々奥へ逃げ込んでしまひました。

此の海軍の應援は、陸軍に取つて大層都合が好かつたので。斯うして敵の力をば、川の下流に引きつけて置けば、上流の防備は自然弛みますから、つまり陸軍の行動が、大きに樂に成る道理であります。

第三章 架橋の掩護

＊ 護 掩 の 橋 架 ＊

されば陸軍の諸隊は、この海軍の應援を利用して、此間に鴨綠江に橋を架け、はやく對岸へ渡る様にしなければ成りません。其所で右翼隊は、義州から四里上流にある、水口鎮と云ふ所、中央隊は九里島、左翼隊は黔定島と、それ／＼場所を選みました。架橋の工事に掛りましたが、かう成ると敵からも、盛んに大砲を撃ちかけて、この行動を邪魔をしますから、それにはまた此方からも、大砲を以つてその工事を掩護ひ、また間近に居る歩兵には、歩兵を向はせて追掃ひ、かうして工兵の架橋工事を、一時も早く出来る様にと、加勢をして居ります中に、此所や彼所の小衝突は、幾度あつたか知れませんが。

今その二三を誌しますと、時は四月二十六日の事でありました。奈良原少佐の一隊は、九里島の敵兵を、追つ掃ふ役目をうけて、十一艘の小舟に乗り、夜の中に此所を渡りましたが、此所には敵の乗

★ 卷 の 城 連 九 ★

馬歩兵と云ふ、西伯利亞でも名高い兵が居りまして、それと見ると銃口を揃へ、急射撃を切めました。

それにも怯まず我兵は、舟を對岸へ漕ぎつけましたが、とう／＼一艘は底を抜かれて、あはれ乗組は川流に擲はれ、その中で七八人の兵士は、行方が知れなく成つてしまいました。

その中に皆渡つてしまひますと、敵は何と思つたか、百餘家に火を附けましたから、その火の光明を目的にして、勢激しく進み寄り此所で暫く闘ひましたが、やがて夜の明けかゝる頃、元化洞に扣へて居た、太田少佐の一隊から、加勢の射撃を初めましたので、敵はたまらず逃げ出だし、遂にこの九里島を、我が手に渡してしまひました。

さて夜がすかりつ明け放れて、兩岸の景色もよく見える頃に成りますと、虎山の頂上に現はれた、敵の大砲一門は、今頻りに橋を架

＊ 護 掩 の 橋 架 ＊

けて居る、我工兵の一隊を目がけて、頻りに撃ち初めました。然し弾は少しも届かず、何も無い河原の砂や、崖の岩に中たるばかりです。味方は却つて之を笑つて、敵手にも成らずに居ります。やがて十一時前に成りまして、高等司令部らしい一群が、丸連城の方から出て、鑿河を虎山へと渡り、於赤島から栗子園へ行く道の、小高い所に現はれて、何か指揮をして居りますのが、手に取る様に見えました。そこで此奴は好い鳥だと、元化洞に居た我が砲兵は、直ぐに照準を付けまして、遙かにこれを撃ちました。

最初の一發は、ちと砲弾が近過ぎましたが、二發目からは誤またず、いつもその頭の上で、凄まじく破裂しましたので、敵は忽ち狼狽へ初め、慌て腐つて逃げ出しました。後に調べて見ましたら、敵の軍團長ザスリッヂは、怪我をしたと云ふ事でしたが、多分此時であつたらうと云ひます。

★ 卷 の 城 連 九 ★

さればこそ、敵は此の勢に恐怖を抱いて、皆本陣近く引揚げましたから、翌二十七日には、この虎山も敵の手を離れ、我が斥候が進んで行つても、少しも危険な事はなくなりました。

また二十八日には、九里島の守備隊から、小倉大尉が部下を率ゐて、同じく架橋の掩護の爲め、對岸に押渡り、栗子園の方まで偵察に出かけましたが、やがて十五六人の敵兵に會ひましたから、直ぐに追掃はうとしますと、こは如何に！ この銃音を聞つけまして、一大隊ばかりの歩兵と、一中隊斗りの騎兵が現はれ、また馬溝に居る砲兵も、此方に向つて撃ち初めましたので、流石の小倉大尉も、三方の敵を引うけ、而も多勢に無勢ですから、已に戦死と見えましたが、やがて元化洞の砲兵と、義州城外の砲兵とから、掩護の射撃を初めましたので、辛くも一方を斬りぬけて、九里島まで引揚げました。まことに此時の戦闘には、兵士の兼て持つて居た彈丸を、大

方撃ち盡したと云ひますから、以て苦戦の程も思ひ遣られまい。

第四章 江上の大砲戦

此間に架橋の工事は、段々捗つて行きましたが、捗れば捗るほど敵の妨害が激しく成りましたから、此上は我軍も、いよいよ大砲の力を以つて、敵の砲兵を撃ちすくめてくれやうと、茲で三十日には、恐ろしい砲戦が初まりました。

まづ九里島に陣を敷いた、近衛師團の砲兵は、夜の明けるのを待つて、虎山の東北の丘陵に居る、敵に向つて一發放ちますと、これを開戦の合圖にして、續いては元化洞の砲兵からも、同じく發射を初めました。

するとまた、九連城の敵の砲兵は、工兵隊の働いて居る、舟に向つて砲弾を降らせ、又しても架橋の邪魔をしますから、今まで黙つ

＊ 戦砲大の上江 ＊

て叩へて居た、黔定島の砲兵は、此時初めて火蓋を切つて、敵陣を撃ち出しました。

かう云ふ風で、敵味方の大砲は、一時に射撃を初めましたから、その音の凄まじさは、百千の雷の、一時に落ちかゝる斗りの有様。天地も崩れるかと思ふ程です。

中にも我が砲兵は、常からよく練習して居りますから、かう云ふ實地の戦争にも、よくその照準を誤たず、放つ弾も撃つ丸も、皆敵の急所に中つて、非常な勢で爆裂しますから、敵の砲兵は肝を潰して、午後二時頃には皆黙つてしまひました。

その後で見ましたら、九連城の東にあつた、假に摺鉢山と呼ばれて居た山は、その摺鉢の頭を壊されて、まるで鋸山の様に成つて居ました。これを見ても我が砲弾の力の、何れ程強かつたか、知れませう。

★ 卷の城連九 ★

かう云ふ風で、この日の砲戦は非常な効を奏して、これが爲めに架橋工事は、大きに樂に成りましたから、此日の中にはすつかり出来上つて、翌五月一日には、いよく九連城の總攻撃と云ふ、大戦争が開かれる事に成りました。

まことにこの日の砲戦は、今度の戦争初まつて以來の、激しい戦争でありましたが、それでも我軍で死んだ者は、下士以下僅に二名負傷は將校と下士卒とを合はせて、三十人よりありませんでした。是も全く敵の砲兵の、射撃が上手で無い故でした。思へば明日の總攻撃も、もう高の知れたものであります。

第五章 九連城の總攻撃

さて我軍は、夜の中に行動を初め、まづ中央の近衛師團は、九里島から於赤島に渡り、それから虎山の東北に移つて、鬩河の在

岸に展開し、左翼隊の第二師團は、九里島から直ぐ對岸に渡つて、中江臺に展開し、また上流の水口鎮からは、右翼隊なる第二師團が渡つて、直ちに鬩河の上流まで進みました。其他重砲隊と云つて、特に大きな大砲を持つて居る隊は、黔定島に陣を構へて、此所から九連城の砲兵を、攻撃する手筈に成つて居ました。

その中に夜が明けて、五月一日の旭日は、東の山に昇つて来る頃對岸にある敵の歩兵は、まづ火蓋を切りましたが、此方の歩兵はまだ撃ち初めずに居ますと、今度は腰溝の高い所にある、敵の砲兵がまた撃ち出しましたので、虎山の東北に陣を構へた、近衛の砲兵は之に向つて、同じく砲撃を初めました。

するとまた敵の方では、我が重砲の一隊の、黔定島に在るのを見て、九連城の側の高地から、頻りに撃ちおろしましたから、何を小

癩なと云はぬばかりに、重砲は恐ろしい榴弾を放つて、此敵を惱ました。其間に第二師團の砲兵も、中江臺に押し渡つて、この重砲に力を合はせ、昨日にも劣らぬ程の勢で、盛んに敵陣を撃ちましたので、其の威勢に恐れたものか、間もなく砲の大砲は、すつかり黙つてしまひました。

戦争は此通り、まづ砲兵の手で開かれましたが、其間に歩兵隊は段々に進んで行つて、今一ト流を押し渡れば、敵地へ切り込みと云ふ有様ですから、敵も棄てゝは置かれません。その銃口を揃へまして、激しく一斉射撃を初めましたから、その弾は雨霰と成つて、味方の頭上に降りかゝりました。元より勇猛の日本兵、こんな事は何とも思はず、同じく射撃を試みながら、ちりくゝと進んで行く其勢に氣を吞まれて、敵は次第に退くばかり。

中にも第十二師團の砲兵は、何時の間にもやら水口鎮から渡つて、

豊河の上流の岸に現はれ、此所から九連城を撃ち出しました。只さへ前に敵をうけて、その砲撃に悩まされて居た、九連城の砲兵は、今また横合から弾を喰つて、何で狼狽へずに居られませう。兵士は倒れる、將校は逃げ出す、上を下への混雑です。

その虚に乗じて、第二師團の先鋒は、胸までもある水を渡つて、九連城の東にある、摺鉢山へと突貫しました。

これを見た近衛の歩兵も、同じく川を渡らうとしましたが、丁度其邊は、土地の者さへ渡つた事の無い所ですから、浅いか深いか解りませんので、暫く逡巡ひましたけれども、其中に大橋上等兵と云ふ、愉快な男が現はれまして、真先に水中へ飛び込み、自分一人で瀬踏をして、全隊を案内しましたから、此所で中央の各隊も、皆對岸に渡つて行き、日本兵得意の突貫を以て、勢はげしく押し寄せましたから、敵は忽ち足元を亂だして、楡樹溝から砲臺頂子を通り、

それから蛤蟆塘をさして、逃げ出し初めたのであります。中にも腰溝の高い所に居て、朝から健氣に働いて居た。敵の砲兵の一隊は、忽ち味方の歩兵に圍まれて、何うする事も出来無く成り速射砲八門に、彈藥車十餘輛を、ちやんと其所に置いたまゝ、命からしく逃げてしまひましたが、その後へ行つて見ましたらば、此所で午飯を食べる心算であつたと見えて、竈にかけてある鍋の中にはスープがグツグツ煮へて居り、其の邊にはまた黒麩が、ゴロ／＼轉げて居たと云ふことです。

茲にまた、鬩河の上流に廻つて居た、第十二師團の諸隊は、深さの肩までもある川を、半ば泳ぎ、半ば歩いて、二隊に分れて押し渡りますと、これを見た敵の砲兵は、よい獲物だと思ひまして、今逃げやうとして居ながら、また砲臺頂子に踏み止つて、この川めがけて撃ちかけましたから、これには流石に我軍も、一時は惱ま

れましたけれども、これも虎山の砲兵が、直ちに加勢をいたしましたので、間も無く渡る事が出来、そして敵の砲兵を、とう／＼追ひ散らしてしまひました。

かくて一二時間の間に、この鬩河の方面には、はや銃の音も聞えなくなりましたが、只九連城の直下に、恐ろしい機關砲の響と、劇しい突貫の聲とが聞えました。これは第二師團の一隊が、必死に成つて攻め込んだので、敵も一生懸命に成つて、此の一面を防ぎましたから、その爲めに味方の損じた事も、此所が一番多かつたと云ふ事です。

けれども勇敢無比の我兵は、死骸を乗り越へ、踏み越へて、喚き叫んで進みましたから、忽ち山の上の敵を掃つて、此所に軍旗を翻へしました。

第六章 九連城の陥落

此日の戦争は、曉方から初まつて、三方から攻め立て突き立て、息をも次がすすみましましたので、九時頃にはもう敵兵は、右往左往に逃げ散つて、此所で彼の九連城も、見事日本兵に占領されてしまひました。

岸は高く、流は急に、天晴れ天然の險岨に依つて、陣地を占めた露西亞兵も、勇猛天下に雙びも無い、日本兵に攻め立てられては、只の一日も支へる事出来ず、互ひに砲火を交へてから、僅か三四時間の中には、もう根據地を乗取られて、もろくも退却を初めたのです。

されば各師團の諸隊は、相欠いで九連城に乗り込み、思ひ／＼に國旗を立て、こゝに萬歳を唱へましたが、まだ敵の敗兵は、蛤蟆

第七章 蛤蟆塘の激戦

塘の方へ行つて、此所で陣を立て直し、再び我が軍に向ふ様子ですから、小癩な者共、一人餘さず討つて取れと、今まで總豫備隊として、後の方に扣へて居た、梅澤大佐(道治)、馬場大佐(命英)などの隊は前方に進んで行つて、この敗兵を追撃しますと、續いて第二師團の野砲兵も、近衛師團と一所に成つて、蛤蟆塘へと向いましたから、此所でまた劇しい戦闘が初まりました。

一體蛤蟆塘と云ふ所は、九連城から鳳凰城へ行く途中で、三方山に包まれた所です。此所へ九連城を逃げた敵が、我先にと崩れて來ましたが、茲で再び踏み止まつて、我軍を支へやうとしましたのは、敵ながらも感心な事。敵はかうして居る中に、安東縣の方から追はれて來た兵を、無事に鳳凰城の方へ落とさうと云ふ心算でせう。

然るに第十二師團の、原田大佐の一隊か、澗河の上流から廻つて大樓房と云ふ所から、敵の後へ出ましたから、さア逃路を閉がれて、何の事は無い袋の鼠、今は死物狂ひと成りました。で、敵兵はまだ此時まで、速射砲だの機關砲だの云ふ、好い武器を持つて居ましたから、此の力を有り丈出して、四方から攻め立てる、日本兵に向つて撃ちかけましたが、此時味方は歩兵ばかり、それが而も間近な所で、速射砲や機關砲を受けては、元よ、石で無い身の、何で傷かずに居りませう。されば牧澤大尉の中隊の如きは、中隊長を初めとして、全隊大方討ち惱まされ、無事で生き残つた者と云つては、中尉一人に下士卒六人、只是ばかりであつた位です。

その中に味方の兵が、段々殖えて來まして、高い所から眞下に居る、敵兵目がけて撃ち込みましたから、是には敵も閉口して、聯隊

長ライミング大佐を初め、半分以上は討死し、残る將校兵卒は、怪我をして生捕に成つたり、力盡きて降参したり、それで漸く戦争の濟んだのは、もう日の暮れかゝる時分でした。

が、何しろこの蛤蟆塘の戦は、思ひの外の激戦でしたから、此爲めに我軍の死傷も、遂に九百餘りに上りました。

松平中尉、堤中尉、名取少尉などが戦死をし、また田林少佐を初め、十四人の將校が、名譽の負傷をしましたのも、皆此の爲なのであります。

尤も敵の方の戦死者は、少くも千五百人を下だらず、師團長カシタリンスキイさへ、逃げる時重傷をうけて、馬から落ちたと云ふ事で、其の他に我軍の捕虜と成つた者は、實に千人にも餘りました。

この激戦が濟みますと、忽ち大雨が降つて來て、夜通しに戦場を洗ひましたが、その雨の中を、我が兵士は八方に走つて、味方の死

骸は云ふまでも無く、敵の死骸まで取りかたづけて、其側に墓場を設け、丁寧に葬式をしてやりました。

第八章 敵軍の同士討

茲にまた、九連城や安東縣から、鳳凰城さして逃げ出した、露軍の一隊は、一トまづ湯山城に立て籠り、此所でホッと息を次ぎながら、猶日本兵の攻めに來るのを恐れて、哨兵を出して見張つて居りました。

すると、また一隊の敗兵は、鬩河の岸を傳はつて、その夜の中に湯山城の南の方の、小高い村に辿りつき、此所に一夜を明かさうとしましたが、見れば湯山城の方に當つて、兵が大勢居る様子ですから、さては日本軍が早くも此所まで進んで來て、乃公達の逃路を閉いて居るのかと、思ふともう自棄に成つて、いきなり之へ射撃しま

敵軍の同士討

したから、さア此方も驚きました。

それ日本兵が追駈けて來たぞと、急いで之に應戦し、此所で凡そ四時間斗と云ふもの、劇しく戦ひましたが、その中に村の方の兵は、勢盡きて逃げ出しましたから、湯山城の兵も漸く安心し、やがて夜の明けけるのを待つて、戦場へ出て見ましたら、こは如何に！昨夜敵だと思つた兵は、矢張り仲間であつたと見えて、其所に倒れて居た死骸を見ると、皆同じ軍服を着け、同じ赤髭を生やして居ました。何れも顔を見合はせて、苦笑をする外はありません。

全體同士討と云ふ事は、よく／＼狼狽へた時の事で、而も敵をよく見極めずに、直ぐに火蓋を切るなどは、元より臆病者のする事です。これを見ても露西亞兵が、日本兵の強い事に、何れ丈恐れられたかが知れませう。

先に定州の戦の時に、日本陸軍の強い事は、大方人に認められま

★ 九連城の巻 ★

した。が、云は、あれは小さな戦で、眞の腕は現はれなかつたので

す。然るに九連城の攻撃には、初めて陸軍の力量も、海軍に決して劣らぬと云ふ事が、明かに解つたのですから、之に感心し、また之を恐れた者は、決して露西亞斗りではありませんでした。

第九章 諸兵の苦心

さて我が第一軍は、敵の金城鐵壁と頼み切つて居た、九連城の守備をば、只の半日で落としてしまひましたが、この九連城と云ふ所は、明治廿七八年の、日清戦争の時にも、此所に居た支那兵を追つ掃つて、我軍の占領した所であります。

尤もその時は、朝から霧が深かつたので、我が軍はその霧に紛れ敵の心付かない中に、城門近く進む事が出来ましたので、随つて之



を陥れるのも、大いに樂でありました。

然るに今度の戦争は、天氣が好かつたものですから、我軍の進んで行くのが、一々敵の目に入りますので、何うしても邪魔をうけ、その困難は一通りではありません。

殊に此戦は、渡河戦と云ひまして、川を渡つて攻め込むのですから、敵が防ぐには都合が好くて、味方の攻めるのには、非常に勝手が悪いのです。

★ 卷の城連九 ★

で、この渡河戦と云ふ事に成ると、一番骨の折れるのは工兵ですが、此時の工兵隊には、近衛師團に岡田中佐、第二師團に伊部少佐、第十二師團に二宮中佐が居りました、それ／＼部下を勵まし、一生懸命に働きましたので、さてこそ三方の大軍が、揃つて此の川を渡つて行つて、一時に敵を攻める事が出来ました。

その代りこの工兵の苦心は、また容易の事では無いので。冷たい水

＊ 諸兵の苦心 ＊

の中に、夜通し身體を浸たし、而も燈火を付けないで、手さぐりで仕事をやるなどは、鐵砲彈の中を進んで行く、歩兵や騎兵の苦勞に比べて、少しも劣りは無いのであります。またこの工兵の仕事を、始終助けて居りましたのは、首に砲兵でありました。この事は前に誌した通りですが、この工兵と同じく、戦闘線には出ないでも、其實非常に骨の折れたのは、輜重兵でありました。

輜重兵と云ふものは、兵糧は云ふまでも無く、其他戰場に必要な道具を、皆運んで行かねば成らないのです。所が朝鮮の道路が、前にも陳べた通りの悪さですから、其所を重い物を運んで行つて、前の方に居る兵隊の、間に合ふ様にするに云ふ事は、何程の苦心か知れませんか。

輜重兵と共に、衛生隊の行動も、亦甚だ大切なものです。衛生隊

★ 九連城の巻 ★

とは軍醫の居る所で、戰場で怪我をした者を、一々こゝへ運び込んで、手当をしなければ成らないのです。然るにこの手当が、只味方の兵ばかりなら可いのですが、敵の降参した者も、怪我があれば一々療治して、味方と同じ様に扱ふのです。その忙がしい事、骨の折れる事、夜もなか／＼眠られない位です。

かう云ふ風に、敵の眼前で戦ふのは、歩兵や騎兵や砲兵ですが、只是ばかりが強くつても、戦は勝てるものではありません。即ち工兵も輜重兵も、衛生隊の者も、亦た兵站部と云つて、兵糧の配り方を扱ふ者も、皆力を一つにして、精出して働いてこそ、初て大勝利が得られるのであります。

然るにまた、この種々の兵隊を、巧く操つる者が無ければいけません。それは司令官に付いて居る、軍の参謀と云ふものであります。まことに此時の参謀長には、以前陸軍大學校の校長をして居た、陸

軍少將藤井茂太や、同じく大學校教官の、大佐松石安治などが居り
まして、よく黒木司令官を助けましたから、さてこそ此の通りの大
勝利を得て、世界各国を驚かしたのです。

されば 大元帥陛下にも、此の功勞をお喜びに成つて、即ち五月
三日には、有難い勅語を賜はりました。

鴨綠江ハ敵ノ恃ミテ以テ天險ト爲ス所、我第一軍及ビ之ニ參加
シタル海軍支隊ハ、計畫周到克ク其施行通過ヲ至クシ、大ニ敵

ヲ擊破シタリ
朕深ク之ヲ嘉ス、惟フニ爾後ノ掃蕩勤勞、倍々大ナルヘシ、汝
將校下士卒、奮テ勉勵セヨ

と、これが勅語であります、また皇太子殿下からも、同じく令旨
を下ださりました。即ち
畫策周到實施適切、大ニ敵ヲ擊破セシ、我軍ノ勇敢ナル行動ヲ

欣尙ス

と云ふので、何れも今度の戦の、計略が行き届いて、行動に脱目が
無く、見事に敵を撃ち破つた事を御賞めに成ると同時に、尙此後も
之に劣らず、骨を折つて働く様にと云ふ、御趣意でありましたから、
之を戴いた黒木司令官を初め、下士兵卒に至るまで、一層勇み立ち
ました。

第十章 金州丸の事

この通り我が第一軍は、見事九連城を占領し、その功勞に依つて、
長くも 大元帥陛下から、御賞美の勅語を賜はり、大いに面目を施
しました。

然るに同じ陸軍でありながら、彼の金州丸に乗り合はせた者の、
不意に敵艦の襲撃を受けて、おめくと生け捕られ、乃至無念の自

殺を遂げた事は、返へすくも氣の毒であります。

而もその日は、恰も我が第一軍の、鴨綠江を渡り初めた、四月二十五日でありました。

★ 事 の 丸 州 金 ★

是より先、露西亞の一隊は、朝鮮國の北の方から、段々南の方へ紛れ込んで、土地を頻りに荒らしましたが、四月十六日には、城津と云ふ所へ亂入し、日本の領事館、郵便局、税關、居留地などを焼き、電信機械を奪ひ去るなど、失敬な事を働きました。その後二十日過には、二百五十の敵兵が、更に吉州から北青と云ふ所まで、進んで來たと云ふ通知がありました。

此時我軍からは、兼て元山に守備隊を出して、かう云ふ時の用心をさせて置きましたから、即ち此所の守備隊長は、歩兵一中隊を金州丸に載せ、利源と云ふ所へ遣りました。そのまた船の護衛としては、第十一水雷艇隊が、海軍から附けられて居たのです。

★ 卷 の 城 津 丸 ★

で、この一隊は、やがて利源へ行つて、陸上を偵察し、敵の寄り付かない様にして、再び此所を引揚げ、元山へ歸つて來やうとしたのは、二十五日の夕方でありました。

所が天氣が急に變つて來て、今にも大暴風が來さうですから、翌日まで見合はせやうとしたのですが、金州丸は急ぎますから、水雷艇隊に途中で分れて、逆捲く浪を蹴立てながら、獨りでどんく歸つて來たのです。

所が夜の十一時過ぎ、新浦と云ふ所の沖合へ來ますと、忽ち大きな軍艦三艘と、水雷艇二艘とが、つひ眼の前に現はれて來ました。元より此邊には、日本の艦隊の來る筈は無い。さては露艦に出會つたのかと、思ひましたがもう逃げられません。その中に敵艦からは、まづ空砲で合圖をして、船を停めると云ひますから、仕方が無しに船を停め、監督の爲めに乗つて居た、海軍少佐溝口武五郎は、

大主計飯田庸治と、船長八木政吉とを連れて、敵の艦へ談判に行きました。これは一時間の猶豫を頼み、その間に乗組の陸兵を、皆逃がさうと思つた故です。

所が敵も然る者で、この溝口少佐の一行を、此儘船に留めて置いて、更に今度は自分の方から、金州丸を調べに来て見ますと、中には陸兵が大勢居ましたので、いよく是は棄て置かれぬと、直ぐに水雷を撃ち出しましたから、金州丸は底を破られ、忽ち沈没を初めました。

もう斯う成つては仕方が無いと、今まで船底に隠れて居た兵士は皆甲板に現はれまして、『おのれ憎い露助奴！ 敵はぬまでも日本兵の、本事の程を見せてくれるぞ。』と、劇しく一斉射撃をして、その後で見事腹を切り、或は自分で鐵砲に當つて、思ひ／＼に自殺を遂げましたが、兵士で無い乗組の者は、端艇に乗つたり、浮囊に縋つ

たりして、辛くも此所を逃げました。その間に船は沈んでしまつたのです。

けれどもこの騒動の間に、櫻井、椎名の兩大尉、寺田、横田の二中尉、檜垣少尉などは、溝口少佐など、一所に、捕虜と成つて連れて行かれました。その無念さは何程でありましたらう？

第十一章 捕虜の厚遇

あゝ捕虜！ 軍人として戦場へ出て、敵に負けて捕虜に成る。實に此位の恥辱はありませぬ。

然しながら、今彼の金州丸に乗組んで居た、陸軍の人々は、此場合よし捕虜に成つても、決して恥辱とは云はれますまい。

元陸軍の軍人であれば、陸で働くのがその役目ですが、かうして船に乗つて居る間は、たとひ劍や銃を持つて居ても、少しも行動が

出来ませんから、普通の人と同じ事です。

またこの乗つて居る船は、軍艦では無い商船ですから、偶々海軍の人が居ても、何の役にも立たないのです。

其所へ又敵の方は、鋭い武器を持つて居る、軍艦や水雷艇で向つて来たのですから、如何に強い將校でも、是には敵ふ譯はありません。

✿ 捕虜の厚遇 ✿

所が露西亞の軍人は、戦場で少しでも苦く成ると、直ぐ白い旗を出して、日本の捕虜に成つてしまひます。そしてその身體を見ると、怪我をして手足の利かない者もありますが、中には立派に働けるのに、平氣で降参してしまふのがあります。是等は自分の國よりも、命の方が大切なのでせう。

けれども我邦では、この捕虜を快く迎へて、直ぐに内地へ送り込み、伊豫の松山にこれを置いて、親切に取扱つてやり、又怪我をし

たり病氣に罹つた者は、それぐ病院に入れまして、手厚い介抱をしてやりました。

兎に角戦争の初まつた時に、一番大切なものは病院ですから、その爲めに平生から、赤十字社と云ふものが出来て居ります。

この赤十字社と云ふものは、世界の文明國なら、何所にも設けてありまして、如何なる戦争の場合にも、この赤十字社の旗のある所には、互ひに弾丸を撃たない約束に成つて居ますが、それは兩方の怪我人を、其所に入れて療治する爲めなので。已に怪我をして働けない者は、もう敵味方の區別をせず、親切にこれを世話するのが、即ちこの社の役目であります。

★ 九 進 城 の 卷 ★

ですから日本の貴婦人達は、戦が初まると直ぐ赤十字社へ行つて、繃帯を巻く事や、看護をする稽古をして、篤志の看護婦と成り、戦地から歸つて来る負傷兵や病兵を、親切に介抱して居りました。

一三〇
所がまたこれを聞きつけて、遙に遠い亞米利加から、日本へ看護を仕に來た婦人がありました。その人はマツギと云つて、兼て看護には長けて居り、度々戦地の病院で働いて、その爲めに勳章を貰つた位の、豪い婦人でありませんが、同じ仲間の看護婦二十人ばかりと、勇み立つて日本へ渡り、日本の看護婦達を助けて、病院で働いてくれました。

かう云ふ風に、他の國の人々までも、手傳ひに來てくれるほど、よく進んで居る我國の、赤十字社の手に依つて、温い介抱をうける露西亞人は、たとひ敵國の捕虜と成つても、まことに幸福ではありませんか。

第十二章 鳳凰城の占領

茲にまた、九連城を占領した我が第一軍は、此所で暫く兵を休め

これから滿洲の内地へ進むのですが、この次に攻めなければ成らないのは、彼の鳳凰城であります。

鳳凰城は、九連城から遼陽へ通ふ途中にあるので、九連城からは凡そ十五里隔たり、此所にも露兵が立て籠つて居るのですから、急には攻め取る事は出來ない筈です。

で、我軍からは、頻りに斥候を出して、敵の様子を探らせながら、いろ／＼進んで行きましたが、五月の六日には、僅ばかりの斥候騎兵で、鳳凰城の東北に、敵の騎兵を襲撃し、更に進んで、二臺子、三臺子、四臺子などに居た、敵を撃ち退けて行く中に、歩兵の一部隊も押し寄せて行つて、とう／＼鳳凰城を占領してしまひました。

實は九連城ほどの力は無くとも、今少し反應があるだらうと思ひましたのに、思ひの外造作も無く、此の城を明け渡してしまつたのは、何う云ふものでありませう？

思ふに是は九連城の戦で、日本兵に散々打ち惱まされた爲に、漸く鳳凰城まで落ち伸びても、まだ臆病風が去らず。なまじ此所に踏み止まつて、前の様な酷い目に會ふよりは、今少し遠く逃げて、十分元氣を盛り返へしてから、ゆつくり戦はうと思つた故です。その代り、敵も此所を逃げる時は、彈藥庫や火藥庫を、わざと自分で焼き棄て、また遼陽街道の人家を、大分焼き掃つてしまひました。これも後に日本兵の來た時、彈藥や火藥を取られない爲でした。けれども衛生材料と云つて、藥や綑帶の類は、澤山落して行きましたから、我軍はこれを拾ひ取つて、早速怪我人の手當に用ゐる大いに便利を得たさうです。

こゝで流石の鳳凰城も、九連城を取つてから、また一週間と経たない中に、樂に占領してしまひましたから、日本軍の向ふ所、さながら野原を風の吹く様に、靡かぬ草はありません。

さればこそ土地の支那人は、皆日本兵を歡び迎へ、此方の云ひつける事、頼む用は、骨を惜まず働いてくれますので、大層都合が好かつたのであります。これと云ふのも日本軍の、規律が厳しく、行儀が好くて、彼の亂暴な露西亞人の様に、土地の者を窘めない故であります。

さて我が第一軍は、その第一の大戦に於いて、已に此大勝利を得ました。次に來たるべき第二の大戦は、果して何の方面に起りませう？

記憶せよ、我が第二軍は、第一、第三、第四師團の、忠勇なる諸兵をあつめ、此間に已に本國を出發して、遼東半島に向ひつゝあつた事を！

第四編 南山の巻

第一章 第三回の閉塞

さても我が第二軍は、陸軍大將男爵、奥保鞆を司令官に頂き、恐らくも伏見宮殿下を初めとし、大島義昌小川(又次)の三中將の下に、第一、第三、第四の、三箇師團の大軍と成つて、四月中旬に宇品を發し、越えて五月五日には、遼東半島の南の方、貔子窩と云ふ所の近所から、盛んに上陸を初めました。

が、その上陸の事を記す前に、此所に何うしても書かねば成らぬ事があります。それは他でもありません。已に二度までも試みた、旅順口の閉塞を、今一度行ひまして、所謂三度目の正直に、見事成功させたと云ふ、我が海軍の功績であります。

第三回の閉塞

★ 南山の巻 ★

さてもこの大役に當つた、第三回の閉塞隊は、五月一日を以て根據地を發し、三日にはもう旅順口に達して、この大事業を仕遂げたのであります。その時は前の二度と異つて、船も八艘と云ふ大仕掛、總指揮官には中佐林三子雄が、新たに選ばれて之に當り、また各船の指揮官には、三河丸に大尉匝瑳胤次、遠江丸に少佐本田親民、江戸丸に少佐高柳直夫、愛國丸に大尉犬塚太郎、佐倉丸に少佐白石葎江、小樽丸に少佐野村勉、朝顔丸に少佐向菊太郎、相模丸に少佐湯淺竹次郎など、それ／＼屈竟の部下を率ゐて、その任に當つたのであります。

尤も初めは十二艘の筈で、林中佐は自ら新發田丸に乗り組み、參謀大尉遠矢勇之助とともに、總隊の指揮をして居たのであります。生憎五月二日の夜、俄かに風が劇しく吹き初め、浪が山の如く起りまして、途中が非常に困難に成り、今まで一列に進んで行つたのが

ちり／＼に吹き分けられて、互ひに影を見失つて了ひ、その中に新
 發田丸は、機關を損じて思ふ様に動けなく成りました。
 思ひがけないこの不幸に、林總指揮官は、齒切をして悔しがりま
 したが、なまじこんな時に無理を行つて、大切の計畫を仕損じては
 何の役にも立たないと、遠矢參謀にも相談の上、援護の爲めについ
 て來た、赤城艦の信號を借りて、『今日の閉塞は見合はせる』と云ふ
 事を、總隊の船に傳へたのであります。
 所が丁度此時は、風と浪とに阻てられて、船が離れ／＼に成つて
 居たものですから、折角の號令が總隊に届かず、林中佐の指揮に従
 ひ、此所から引返へしてしまつたのは、新發田丸と他三艘だけで、
 残る八艘の閉塞船は、その儘風を切り、浪を破つて、旅順口へと向
 ひました。

第二章 閉塞の成功

元より閉塞と云ふ大役を引うけるからには、誰も生きて還らうと
 は思ひません。さればこそ世間では、この事業に當る勇士を、決死
 隊と名づけた位ですが、さうかと云つてこの事業は、元と港口を閉
 ぐのが趣意で、死ぬ斗りが決して目的ではありません。
 されは相模丸の湯淺指揮官の如きは、部下の者を誡めまして、『今
 度の任務と云ふものは、實に重いものであるから、無益に只死ぬ事
 のみ急いで、大切な任務を忘れる様では成らんぞ。』と、注意に注意
 を與へて居りましたが、何分船は古船で、機關も丈夫でありませ
 ず、から、かう云ふ風波に出會ひますと、思ふ様に働く事が出来ず、遂
 に初めの手筈も狂つて、各自が思ひ／＼に、突進しなければ成らぬ
 事になりました。

＊ 閉塞の成功 ＊

で、列も亂れてしまひましたから、今まで四番目に進んで居た、
 匪瑛大尉の三河丸は、一番先に進んで行つて、今までの閉塞船の、
 一つも入つた事の無い位な、奥の方まで入つてしまひました。
 次いで本田少佐の遠江丸、高柳少佐の江戸丸、野村少佐の小樽丸
 湯淺少佐の相模丸の四艘は、港口まで行きましたが、何しろ此時は
 敵も二度の閉塞に懲りて、兩岸の大砲を増し、淺瀬に居据りのレト
 ウキザンには、特に機關砲を備へ、港の口には防材を設け、また水
 雷を沈めて置いて、十分に防備をしてありましたから、この中を進
 んで行く閉塞隊は、まるで火の海に飛込んだと、少しも差異はあり
 ません。
 また白石少佐の佐倉丸、犬塚大尉の愛國丸、向少佐の朝顔丸は、
 前の五艘と少し離れて、港の外に沈んでしまひました。
 此時不思議であつたのは、一番奥深く進んで行つた、匪瑛大尉が

★ 南 山 の 巻 ★

却つて無事に引あげ、却つて其次に行つた高柳少佐が、防材の手前
 で爆沈する前に、敵弾に中つて戦死した事です。
 また残念でありましたのは、只に戦死の多かつた斗りで無く、野
 村少佐の小樽丸、向少佐の朝顔丸、湯淺少佐の相模丸等は、乗組残
 らず行方が知れず、其他犬塚大尉、白石少佐、青木大機關士など、
 將校初め下士卒の、生死も判然しないのが、實に少からぬ事であり
 ました。
 これは何故この通りに、生死の解らぬのがあつたかと云ふと、何
 分天氣が悪く、風波が劇しかつた爲めに、折角隊員收容の爲めに、
 水雷艇や驅逐艇が、澤山付いて行つたのも、十分に役に立たなかつ
 た故でした。
 後で考へて見ると、此時生死不明であつた人達は、大方陸へ泳ぎ
 つき、それから敵の砲臺へ斬り込んで、花々しく戦死を遂げたらう

と云ふことです。

この一事を聞いても、今度の閉塞隊の行動が、何程壯烈であつたか、解りませう。また此大事業に參かつて、九死の中から一生を得、漸く無事に歸つて来た人の中には、其時あまり砲彈を浴びせられ、劇しい響きを聞かせられた爲めに、まるで豊に成つた者もある位です。なんと恐ろしい話ではありませんか。

さて、三度目の閉塞隊は、天氣の悪かつたのと、敵の防備の嚴重であつたのとで、非常に澤山の人を失ひましたが、それにも關はず閉塞の事業は、殆んど申分の無い迄に、よく出来上つたのですから、これに依つて敵の艦隊は、いよ／＼港を出る事が出来ず、これに依つてまた我が第二軍は、何の懸念する事も無く、大手を振つて上陸する事が出来ました。

＊ 功 成 の 塞 閉 ＊

第三章 上陸の困難

所でその第二軍は、抑も何所から上陸しましたらう？

それは遼東半島の、東南の岸にある、貔子窩と云ふ所から、西南へ五六里隔つた、鹽大澳と云ふ灣の中で、臺山と云ふ山の下でありました。

元より其邊は、船着の港が出来て居るのでは無く、普通の濱邊へ船を寄せて、それから陸へ上らうと云ふのですから、決して容易な仕事ではありません。

まして此の邊は、平生浪の荒い所で、汐の流れがまた急ですから、つひ鼻の先に見えて居る陸へ、船がなか／＼着かないので、力の弱い小蒸汽や、小さな端艇などでは、動もすると汐に流されて、却つて沖の方へ出てしまふと云ふ仕末です。

★ 卷 の 山 南 ★

＊ 陸上の困難 ＊

場所が已に此通り不便です。所を上がらうと云ふ者は、元より人間ばかりでは無く、馬もあれば大砲もあり、武器もあれば糧食もあり、それが三箇師團分と云ふ、非常な澤山な數ですから、これを皆運び上げる困難は、逆も筆には盡されない位でした。その上また生憎な事には、丁度その頃風が吹きついで、只さへ荒い浪が、一層高く打つて居ますので、動もすると端艇を覆へされ、また馬を流されて、その爲めに五六匹の馬を、とう／＼溺れさせてしまひました。が、勇氣に充ち、忍耐に富んで居る我が軍は、このあらゆる困難を排して、五月五日から三日ほどの間に、何萬人と云ふ大勢で、無事に上陸してしまひましたが、この五月五日と云ふ日は、日本では端午の節句と云つて、昔から尙武の祭をするると云ふ、誠に目出度い日なのであります。

★ 南山の巻 ★

その目出度い日に當つて、第二軍の勇將猛卒が、此所に首尾好く上陸したと云ふのは、何と云ふ目出度い事でありませう！而もその上陸した地は、名にし負ふ遼東半島！忘れもせぬこの土地は、十年前の干渉で、おめ／＼支那へ還へしたのを、其後狡猾な露西亞が、さも我物顔に占めて居る所です。して見ると此土地は、支那であつて支那で無く、敵國露西亞も同じ事でありませう。ですから我軍も、豫め用心の爲めに、細谷少將の率ゐて居る、第三戦隊の各艦が、上陸掩護の爲めに付き添ひ、また野元海軍大佐が、別に陸戦隊を引連れて、陸上の敵兵を追掃ふ爲めに、前以て陸へ押し上がりましたが、その勢に恐れてか、敵は、や逃げて影も見せず、其爲めにこの邊の土地は、鐵砲一發も放さぬ間に、見事我軍で占領してしまひ、その一番高い所へ、手早く日章旗を突立て、天皇陛下の萬歳を唱へたのは、何と愉快な事ではあり

ませんか。

尤もこの陸戦隊は、是より先佐世保を發し、香港丸と日本丸に乗つて、特に此所まで向つて來たのですが、その上陸する時などは、とても端艇では漕ぎ着けないので、餘儀なく皆海の中へ踏み込み、水が臍まで届く位の所を、凡そ千米突(八町程)斗りの間、徒歩で押し渡つたと云ひますが、成る程この勇氣には、敵もまづ肝を冷やして、戦はない中に逃げてしまつたのも、決して無理は無いのであります。

第四章 普蘭店の鐵道破壊

かくて鹽太澳を上陸した、第二軍の先鋒隊は、直ぐ此所から兩手に別かれ、一隊は貔子窩へ、一隊は普蘭店へと向ひました。

貔子窩は黃海に向つた町、普蘭店は遼東灣に沿ふた驛で、此所には旅順から露西亞の本國へ通ふ、鐵道の停車場もあり、共に敵には

大切な所ですから、まづこの二ヶ所を衝き、電線を切り、鐵道を壊して、敵の力を削ぐ爲めなので、若しこれ等を断ち切つてしまへば、それこそ旅順は孤立に成つて、とても十分の働きは出來ないので、で、貔子窩に向つた一隊は、敵の逃た後であつたので、難無く目的を達しましたが、普蘭店へ押しよせた一隊は、やゝ之に近づいた頃、南の方の岡の上で、十人ばかりの騎兵と、歩兵の一部隊を見つけてましたから、此所に初めて火蓋を切りましたが、間もなく敵は逃げましたから、その勢で進んで行つて、間もなく普蘭店の停車場へ押し寄せました。

するとこの停車場には、敵の兵士が百人ばかりで、堅く守つて居りましたが、我が攻撃の激しさに、暫時も支え得ず、やがて退却を初めましたから、こゝで首尾よく我軍は、この普蘭店を占領しました。

此時俄にレールを軋らせて、一列の汽車は旅順の方から、此方へ向つて走つて來ましたが、今しもこの停車場に、日章旗の高く翻へるのを見ますと、いきなりその窓から、一齊射撃を初めましたから、何で我兵の猶豫しませう！『おのれ小癩な！』と云ひながら、銃口を揃へて激しく撃ちかへしましたら、今度はその汽車の窓から、赤十字の旗を出して、頻りにこれを振り立てました。

元來赤十字の旗は、元より神聖な物として、如何なる亂戦の間にも、決して手を出さぬと云ふ、世界中の約束ですから、我軍はその約束を重んじて、一時射撃を中止したのです。

で、その汽車の近づくを待つて、一應これを検めやうとしますと、こは如何にその汽車は、此方の油断を見すまして、急にまた速力を増し、北をさして一散に、とう／＼逃げて行つてしまひました。

さてはおめ／＼詐されたかと、我軍は切齒をしながら、これを捕

やうとしましたが、如何に剛勇な日本兵も、汽車を追ふ足はありません。

後で考へて見ますと、彼の旅順口に立て籠つて居た、アレキシーフ總督は、我が手強い攻撃に、とても敵はぬと思つて、ボリス大公と云ふ親王と一所に、遼陽さして逃げ出したのは、丁度五月六日だと云ひますから、事によつたらこの兩人は、此時此汽車に乗つて居て、赤十字の旗を濫用し、まざ／＼此所を逃げたのかも知れません。果してさうであつたとすれば、此時此汽車を逃がしたのは、残念とも無念とも、實に云ひ様の無い事でした。

それにつけても、敵の狡猾さ！卑怯さ！これでも歐羅巴の文明國と、自分で威張つて居るのですから、實に呆れるではありませんか。

で、この汽車を逃がしたのは、如何にも残念でありましたが、

其後間もなく我が軍は、工兵隊の手を以て、鐵道を打ち壊わし、電線を断ち切つてしまひましたから、これでいよいよ旅順口は、糸目の切れた紙鳶の、木の枝に掛つたのと同じ姿に成りました。今に大雨に打たれ、ば、何で破れずに居られませう。

第五章 大戦前の小衝突

普蘭店の鐵道を、首尾好く破壊した後、更にまた一枝隊を進めて、普蘭店と三十里堡の間にある、鐵道や電線などの、交通機關を破壊させました。

で、この枝隊は、五月八日に龍口と云ふ所まで來ました。これは三十里堡の東北、一里半ばかりの所ですが、此所にも百人斗りの敵兵が居て、一生懸命に守つて居りましたから、思ひの外面倒に成り朝の八時半から十一時まで、激しく戦ひました揚句、漸く敵を撃ち

退けて、長さ半里斗りの所を、とうとう破壊してしまひました。が此時の激戦で、歩兵中尉桂勇喜を初め、下士以下三名は戦死し、十九名は負傷をしましたから、其死骸は小高い山の上に埋めて、手厚く葬つて置きました。

それからまた十二日には、普蘭店の北六里ばかりの、瓦房店と云ふ所の、交通機關を破壊してしまひましたが、此間に其所や此所で小衝突は幾度もありまして、やがて十六日には、南へ進んで金州城の北の方にある、十三里臺の敵を破つて、この高地を占領したのであります。

一體金州城と云へば、彼の日清戦争の時にも、激しい戦のあつたので、其名のよく知れた所ですが、十三里臺はその手前にあつて、此城は大切な要害なのです。

さればこそ敵兵も、まづ此所に目を着けて、一生懸命にこれを守

＊ 大戦前の小衝突 ＊

一五〇
りましたから、戦争も随つて激しく成り、正午過から四時頃まで、三時間あまりも撃ち合った末、漸くこれを占領しました。此時我軍では、砲兵少佐水谷喜三郎、歩兵大尉小木谷好之助、砲兵中尉板倉光夫、同菊地勇熊など、何れも負傷をしたのであります。が、然し將校に戦死は無く、只下士以下の死者と傷者が、百四十六人ありました。

此通り、砲兵の將校に、多くの負傷の出来たのは、全く敵の砲兵陣地が、都合の好い所にあつた故で、我軍はその爲めに、少しは惱まされませんでしたけれども、元より勇猛な士卒の働きで、遂にそれを撃ち破り、果は將校一人と、下士以下五人の捕虜を得、また少くも三百人以上を、斃し又傷けたものであります。

その後又十九日には、肖金山の北の方で、此所から逃げた敵と出會ひ、また三十分ほど戦つて、これを追掃つてしまひましたが、この時少尉小野寺福松は、部下の下士卒四名と共に、此所に名譽の戦死を遂げました。

かう云ふ風に、上陸後二週間ばかりの間は、大した戦争もありませんでした。その小衝突の間に、金州城の東北の、一帯の小高い所は、皆我軍の物になりましたから、これでこの金州城は、はや占領したのも同し事に成りました。

尤も金州城と云ふ所は、廣い平地にある城ですから、戦争の場合こゝに立て籠るには、餘り都合の好い所ではありません。ですから日清戦争の時には、支那兵が大切に守つて居たのも、遂に破られたのであります。が、今度の露西亞兵は、流石に金州城ばかりは守りません。却つて城の南にある、南山と云ふ山に據つて、此所に十分の兵力を集めて居ります。されば此所で我と敵とは、金州城を間に置いて、北と南の山の上に、相對して居る姿になりました。

★ 南 山 の 谷 ★

第六章 金州の占領

一體南山と云ふ山は、遼東半島の南の端で、別に金州半島と云はれて居るにあり、左右海に狹まれて、まるで帯の様に成つて居る間に小高く聳えた山であります。

其幅一里ばかりの間、一體に山に成つて居て、道と云つては只一筋、左には大連灣を扣へ、此所の和尚島に砲壘もあれば、また灣内には砲艦一隻を浮べた外に、機械水雷を幾個となく沈めてありますから、海軍が来て攻める事も出来ません。

また右手の金州灣は、常から遠淺の所ですから、大きな軍艦を乗り入れて、此所から迫まると云ふ事も、まことに容易では無いのです。

されば露西亞では、旅順を守ると云ふ場合に、此所を第一の防禦

＊ 領 占 の 州 金 ＊

地にする氣で、二三年も前から、已に用意をして居りましたから、堡壘も砲臺も、決して一時の物では無く、一年や二年立て籠つても、なか／＼破れる事の無い様に、所謂半永久的の築き方をしたのでした。

★ 谷 の 山 南 ★

で、此所に二十珊、十五珊、十珊などの、大きな砲を凡そ百門も据ゑつけ、それから麓の方千米突斗りの間には、恐ろしい鐵條網を張りまはし、東と北との麓には、地雷火を幾個所も仕掛け、また高い所からは、探照燈を光らして、戰場をよく見える様にするなど、出来る丈の手を盡して、防備を嚴重にして居りますから、これを攻め落さうと云ふのには、またそれ丈の覺悟の要る事、元より云ふまでもありません。

されば奥司令官は、參謀長落合少將(豊三郎)と、豫め謀略を定めまして、三個師團を三方に分け、まづ中央には、伏見宮殿下の率ゐさ

＊ 領 占 の 州 金 ＊

せたまふ、東京の第一師團を進ませ、大島中將の率ゐる、名古屋の第三師團を左翼に、小川中將の率ゐる、大阪の第四師團を右翼にとそれ／＼、持場を定めまして、この南山へと向つたのは、五月も二十五日でありました。

然るにこの夜、空は急に曇りまして、やがて激しい雷の音と共に非常な大雨が降り出しました。我が全軍はこの雷雨の中に、前進の命令をうけまして、勇み立つて進軍を初めました。

その中に、第一師團の一部隊は、この雷雨の激しさに紛れて、金州城の方に向ひ、城外凡そ八百米突の所に、工兵隊の手を以つて、歩兵射撃の掩堡を築きました。まだそれでも飽き足らず、やがて朝の五時半、決死の工兵七八名斗りは、名々身軽に扮装しまして、手に／＼綿火薬を携へ、そつと敵陣に忍び寄り、東と南の城門を、一時に打ち壊しましたから、歩兵隊はこの勢に乗つて、どつと城内へ

★ 卷 の 山 南 ★

第七章 南山の大激戦

衝いて入り、これに恐れて逃げまどふ敵には、また砲兵が追撃を喰はせ、かくしてこの金州城は、間もなく我が軍で占領してしまひました。

残るは南山の砲壘であります。が、此所は前にも云ふ通り、天然の要害の上に、人工の防備を十分加へ、その上地形が狭まつて居て、横へも裏へも廻はれない所ですから、如何に戦争の上手な人でも、計略の施しやうがありません。此上は只力づくで、是を撲つ潰さねば成らないのです。あゝ力づく！ 我が軍はこの南山に向つて、果して如何なる力を揮ひましたらう？

その中に夜が明けましたら、雨も止み霧も晴れまして、今は南山の敵壘を、つひ鼻の先に見ましたから、まづ我砲兵隊は、内山少將

＊ 戦 激 大 の 山 南 ＊

の指揮の下に、一齊に砲火を開きますと、敵も同じくこれに應へて、激しく弾を撃ち初め、その音の激しさは、昨夜の雷を千ほど束ねて、一度に落した位でしたが、その間凡そ三時間斗り、午前十一時に成つて、敵の砲の一部分は、我が爲めに撃ち萎められ、また速射野砲の二中隊は、南山の後の方の、南關嶺まで引揚げましたが、それでも砲壘の中にある敵砲は、少しも痺む色は無く、相變らず弾を浴びせかけて、随分我軍を苦めました。

で、この砲の力ある間は、滅多に歩兵は進まれません。しかも敵は高い所に構へ、味方は低い所を進むのですから、先方の弾に効驗があつて、此方の銃は少しも役に立ちません。仕方が無しに物陰へ隠れて、少しでも敵に隙の出来るのを、只覗つて居るばかりであります。

その中に時刻は移つて、はや午後になりましたが、まだ敵は少し

★ 巻 の 山 南 ★

も弱らず、遠い砲兵には砲弾を飛ばせ、近い歩兵には速射砲を浴びせて、頻りに我軍を苦しめるばかり、此分ではこの南山は、どうしても落とす事が出来無いかと、一時は危ぶまれる位でした。

けれども勇敢なる奥大將は、『この第二軍の司令官として、此所に上陸後の第一戦を開いたのに、高の知れた南山一つ、攻め惱んだと云はれては、この大命を承まはつて来た、大元帥陛下に申譯が無いぞ。イデ此上は損害を顧みず、今日の中にこの山を、是非共攻め落してしまへ！』と、虎髯を逆立て、言葉鋭く下知をされましたから、これを聞いた全軍の兵士は、一時に千人力を得た心地、『ヨシ、かう成つては命は入らんぞ、鐵條網も踏み破れ、地雷火なんぞも踏み潰せ！』と、勇み立つて突貫しました。

所が何しろその道には、砲弾銃丸雨霰と、隙間も無く撃ちかけられるのですから、十歩進めば五人撃たれ、二十歩進めば十人斃れ、